ニュース

News

都市文化研究センターの活動

栄原　永遠男

事業推進担当者の交替の提出

①平成16年2月末もしくは3月末で退職が予定されている事業推進担当者3名については交替することとした。

②その後任を人選した結果，中才敏郎（哲学），石田佐恵子（社会学），松村國隆（ドイツ語ドイツ文学）の3名を届け出ることとした。

事業推進協力者の追加

6月の募集時に海外出張中であった2名（土屋礼子・社会学，松浦恆雄・中国語中国文学）につき，「研究計画書」を検討した結果，事業推進協力者として承認した。

博士研究員の採用等

①平成14年度に博士（文学）の学位を取得したCOE研究員2名のうち，1名（岸政彦・社会学）は7月1日付で大阪市立大学博士研究員に採用された（4月～6月はCOE研究員）。

②他の1名（岩宮隆司・日本史学）は，4月以来COE研究員として採用されていたが，7月1日付で奈良県立民俗博物館に主任学芸員として就職した。これにともなって，COE研究員から離れた。

COE研究員・COE特別研究員の採用

①COE研究員1名（向井有理子・心理学）を学術振興会特別研究員に推薦した。正式採用にともない，COE研究員の身分は継続するが，研究費の支給は停止することとした。

②現在，学術振興会特別研究員である4名（町田哲・日本史学，後藤真・日本史学，高畑幸・社会学，鈴木博子・国語国文学）をCOE研究員として採用することとした。ただし，研究費は支給しない。平成16年度以降，学術振興会特別研究員に採用されたものについても，同様の措置をとる。

③平成16年度からCOE特別研究員の資格を新たに設けることとした。

④COE特別研究員には，平成15年度中に博士の学位を取得したCOE研究員を採用し，規定の研究費を支給する。

⑤COE研究員以外で，平成15年度中に博士の学位を取得したもののうち，研究テーマがCOEに合致する場合は，COE特別研究員に採用し，規定の研究費を支給する。

会計中間報告

10月31日現在で，各研究計画ごとの予算の執行状況を集計し，報告した。

医療体制

来日したCOE研究員や招聘研究者が病気となった場合は，身分証明書を提示の上，保健管理センターで診察が受けられることとなった。診察代金は学生並みで本人負担となる。

重点研究との関係

①重点研究検討委員会に常任委員会委員（阪口，金児，山野，栄原）・COE事務局員（井上浩一）が参加した。他のメンバーは，研究科長，両評議員，教務・庶務・予算の各委員長である。

②10月22日，10月29日，11月7日，11月19日の4回会議を開き，平成15年度はAチーム（比較都市文化史）を中心として申請することとなった。

③重点研究はCOE拠点形成事業を支援するものとして位置づけられた。

COE事務局の活動

①事業推進担当者，同協力者，博士研究員，COE研究員の身分証を発行した。

②来日した外国人COE研究員，招聘研究者が学術情報総合センター利用者カードの発行を受ける手続きを，同センターと協議の上行なった。

③『都市文化研究』第2号を発送した。

④来日した海外の研究者・外国人COE研究員のパソコン，インターネットなどのIT環境を整備した。

⑤『市大公報』51号（8月発行）にCOEの全体を紹介する文章を執筆した。また，これを英訳した。日本文・英文とも，COEホームページにあげた。

⑥図書の管理体制を改善した。

⑦COE事務室のIT環境の整備を進めた。また，関係書類の整理，FDの整理，備品の整備等，事務環境の改善に努めた。

常任委員会・センター会議の開催

〔常任委員会〕

第14回

7月9日（水）午前10時～12時
文学研究科長室
第15回
9月11日（木）午前10時40分～12時
文学研究科長室
第16回
10月1日（水）午前10時～12時
文学研究科長室
第17回
平成16年1月14日（水）午前9時～12時30分
文学研究科長室
〔センター会議〕
第14回
7月16日（水）午前10時～12時
文学研究科長室
第15回
9月17日（水）午前10時～12時
文学研究科長室
第16回
10月22日（水）午前10時30分～12時30分
文学研究科長室
第17回
11月19日（水）午前10時30分～12時30分
文学研究科長室
第18回
12月10日（水）午前10時～12時
文学研究科長室
第19回
平成16年1月21日（水）午前10時～12時
文学研究科長室

インターナショナル・スクール

阪口　弘之

インターナショナル・スクールは，大阪市立大学文学部創立50周年を機会に，21世紀COEプログラムと連動して，新たな国際学術交流教育拠点を形成するべく，COEの研究拠点「都市文化研究センター」に附属して設置された新教育研究組織である。

めざすところは，「都市文化研究センター」と関わりの深い世界各地から著名研究者を招聘して，COE研究員（大学院後期博士課程学生）を対象に，世界レベルで国際的な研究教育を推進することにある。一方で，これを前期博士課程学生や学部生，更には留学生等にも，広く単位制度をもって公開することで，他に類を見ないカリキュラム制度として立ち上げた。

授業科目として「比較文化交流論Ⅰ」「同Ⅱ」「国際都市文化論Ⅰ」「同Ⅱ」「国際都市社会論Ⅰ」「同Ⅱ」の6科目を設けて，毎年順次開講される。今年度は，イギリス・フランス・ドイツ等から，下記のごとく7名の研究者を招いて，「比較文化交流論Ⅰ」を「大阪市立大学文化交流センター」で開講した。受講者数は，COE研究員を含めて，約80名であった。なお，最終日（9月27日）には，COEと文学部創立50周年の合同記念事業として，国際シンポジウム「海外の日本研究と国際交流の現状」が上記講師をパネリストに開催された。こちらは卒業生にも開放され，百数十名の参加があり，フロアからも活発な質疑応答があった。これらの詳細は，関係する論考をとりそえて，『大阪市立大学文学研究科叢書』第2巻に特集されるので参照されたい。

インターナショナル・スクール
（「比較文化交流論Ⅰ」プログラム）

平成15年9月24日(水) ～ 同27日(土)
於　大阪市立大学文化交流センター

日時	講師	講義題目
9月24日(水)		
Ⅰ	阪口　弘之	海外の日本研究と国際交流の現状
Ⅱ	アンドリュー・ガーストル	文学研究のアプローチ：比較文学の役割
Ⅲ	ロベール・デュケンヌ	フランスにおける仏教学の現在 —— ①

Ⅳ	ローラント・シュナイダー	日本の短詩型文学の世界性
9月25日(木)		
Ⅰ	イェルク・クヴェンツァー	比較文化研究の可能性と限界 ―― 日本とドイツ・ヨーロッパ文化圏を中心に ――
Ⅱ	ロベール・デュケンヌ	フランスにおける仏教学の現在 ―― ②
Ⅲ	ユーディット・アロカイ	日本詩歌の修辞法
Ⅳ	北川扶生子	トラウマとしての異文化体験 ―― 夏目漱石のロンドン留学の英文学研究 ――
9月26日(金)		
Ⅰ	エヴァ・カミンスキー	ドイツの工芸博物館を通してみた日独文化交流 ―― ハンブルクを事例として ――
Ⅱ	イェルク・クヴェンツァー	文学，宗教と言葉，そして夢
Ⅲ	ロベール・デュケンヌ	フランスにおける仏教学の現状 ―― ③
Ⅳ	アンドリュー・ガーストル	パフォーマンスから生まれる文学・芸能 ―― 上方歌舞伎文化 ――
Ⅴ	阪口　弘之	2003年インターナショナル・スクールをふりかえって

9月27日(土)
国際シンポジウム　　14:00～17:00 「海外の日本研究と国際交流の現状」
パネリスト ■　阪口　弘之　　(文学研究科) ■　アンドリュー・ガーストル　　(ロンドン大学東洋アフリカ学院) ■　ローラント・シュナイダー　　(ハンブルク大学) ■　ロベール・デュケンヌ　　(フランス極東学院) ■　イェルク・クヴェンツァー　　(ドイツ《恵光》日本文化研究センター)

Ａチーム「比較都市文化史研究」の活動

井上　　徹

1　はじめに

本年度は，大阪を中心とする文化と社会，中国の都市と文化，都市空間，世界の港湾都市などのいくつかの柱を立てて，個々の課題を深める方向で事業計画を設定することに主眼を置いた（本誌第2号参照)。平成15年7月―12月期はこの活動指針に基づき，六つの事業計画を大枠として，月例研究会を活動の軸としながら，計画を実施することを目指した。

計画実施を審議する場はＡチーム運営委員会である。本期は，第15回（7月17日)，第16回（9月20日)，第17回（10月25日)，第18回（11月29日)，第19回（12月22日）の計5回の運営委員会が開かれた。この委員会における審議に基づき，Ａチームの活動を報告したい。

2　事業計画

本チームは六つの事業計画を設定した。それぞれの計画内容と本期における事業推進状況は次の通りである。(　) 内は事業推進担当者。

①「Ａチーム(比較都市文化研究)研究会」(井上浩一)

計画：月例研究会を中心とし，海外研究者を招いたシンポジウムを開催する。

実施状況：研究会及びシンポジウム開催の実施状況は後述する。

②「都市文化創造において歴史的都市の文化伝統が果たす役割に関する比較研究」(井上浩一)

計画：港湾都市大阪に近似した諸条件をもつ海外諸都市に注目し，それらの諸都市における歴史的文化伝統を探り，また海外の研究者を招聘してシンポジウムを開催し，報告書を刊行する。

実施状況：5名の共同研究者（大黒俊二，中野耕太郎，早瀬晋三，松村國隆，毛利正守）

の協力のもとに，計画を始動させた。まず井上浩一，松村國隆，中野耕太郎がそれぞれ，イスタンブール，トリエステ，バンクーバーに出張し，都市文化遺産を対象として現地調査を実施した。この調査を踏まえて，ミニ・シンポジウムが開催された（後掲の第13回研究会参照）。シンポジウムの報告書『歴史遺産と都市文化創造――世界から大阪へ――』は平成15年12月に刊行された。

③「前近代の日本と中国における都市の比較史的研究」(中村圭爾)

計画：社会科学院歴史研究所(北京）との共同研究を実施する。シンポジウムの開催，成果報告書の刊行，同研究所の研究者，院生の受入などを実施し，それらを通して学術交流の緊密化を図る。

実施状況：辛徳勇を窓口として，社会科学院歴史研究所と共同研究を開始した。参加者は日本側6名（中村圭爾，栄原永遠男，塚田孝，井上徹，仁木宏，平田茂樹），中国側6名（辛徳勇，彭衛，何海燕，劉暁，定宜荘，韓茂莉）である。当初，同社会科学院において研究集会を開催し，両国の研究状況に関して討論を行う予定であったが，SARSの流行のため，実施不可能となった。そこで，メール，書信等の手段で双方の連絡を緊密にするとともに，双方の共同研究者が原稿を提出し，相互理解を深めている。本年3月，中国社会科学出版社より報告書を刊行する予定である。現在，日本側の原稿の中国語訳は終了し，中国側の原稿もほぼ出揃っている。

④「近世近代大阪関係都市史料の蒐集」(塚田孝)

計画：大阪を軸とした都市文化の担い手や空間的特質に関する研究の一環として，近世・近代の大阪に関する都市史関係の基礎史料を収集する。

実施状況：蒐集した大阪関係史料のうち，大坂町触を分類・編纂した「せん年より御ふれこみ」の翻刻・刊行をめざして準備中である（平成16年3月刊行予定）。また，史料蒐集と並行して分析・研究をおこなってきたが，その成果を『大坂における都市の発展と構造』（山川出版社）として平成16年3月に刊行する予定である。

⑤「大阪関係古文書の写真版による収集」(仁木宏)

計画：東京大学史料編纂所所蔵の大阪関係古文書を調査し，頒布を受けた史料を整理し，データベース化する。

実施状況：当該古文書の写真版に関する調査を終え，現在データベースを作成している。

⑥「都市大阪関係日本史文献目録データベースの作成」(仁木宏)

計画：『史学雑誌』に掲載された関連文献をピックアップし，それらをデータベース化する作業を進める。

実施状況：現在，当該の文献をデータベース化する作業を進めている。

3　研究会

事業計画①「Ａチーム(比較都市文化研究)研究会」は，②以下のプロジェクトとも密接な関係を保ち，日常的に比較都市文化を考察する場として重要な位置を占めている。平成15年7月から現在までの間に5回の研究会を実施した。

第11回研究会

平成15年7月17日（木）13:30～17:00

会場：大阪市立大学法学部棟
　　6Ｆ第2会議室

報告者1：大村拓生（大阪市立大学・COE研究員）
「中世嵯峨の都市的展開」

報告者2：穴沢彰子（大阪市立大学・COE研究員）
「唐・五代の饗宴・祝祭における秩序構造」

第12回研究会

平成15年9月20日（土）　13:30～17:00

会場：大阪市立大学田中記念館
　　第2会議室

共通テーマ「都市文化と芸能興行」

報告者1：神田由築（お茶の水女子大学）
「都市文化と芸能興行――大坂を中心として」

報告者2：鈴木博子（大阪市立大学・COE研究員）
「屋敷方での役者たち」

第13回研究会

平成15年10月25日（土）　13:00～17:00

会場：大阪市立大学経済学部棟
　　2Ｆ第4会議室

ミニ・シンポジウム
「歴史遺産と都市文化創造」

現地調査報告：
松村國隆
「トリエステの場合」
井上浩一
「イスタンブルにおけるビザンツ歴史遺産
――教会・修道院を中心に――」
中野耕太郎
「多文化都市バンクーバーの文化遺産
――Asian Heritagesを中心に――」
仁木宏
「日本中世史家が見た独・伊・仏の港湾都市――中世・近世の港湾跡とその活用――」
コメント：
エヴァ・カミンスキー
「都市文化創造におけるハンブルク工芸博物館の役割について」

第14回研究会
平成15年11月29日（土）　14:00～17:00
会　場：大阪市立大学法学部棟
11Ｆ711C教室
報告者1：岩宮隆司（元COE研究員・奈良県立民俗博物館）
「平城京内の業務運営」
報告者2：図師宣忠（COE研究員・京都大学大学院生）
「中世トゥールーズにおける〈法〉と文字文化――都市カルチュレールの成立をめぐって――」

第15回研究会
平成15年12月21日（火）　13:30～17:00
会　場：大阪市立大学法学部棟
11Ｆ711C
共通テーマ「宋代の祠廟」
報告者1：松本浩一（筑波大学）
「城隍神の性格と城隍廟：宋から明中期までの時期を中心に」
報告者2：須江隆（日本大学）
「祠廟の記録に見える近世中国の『鎮』社会――南潯鎮の事例を中心に――」

公開講演会（Ｃチームと共催）
平成15年12月22日（月）14:00～17:00
会　　場：大阪市立大学文学部増築棟
3Ｆ363室(地理学情報資料室)
講演者1：K. カンタマラ（タイ・チュラロンコン大学）
「タイの仏像彫刻」
講演者2：T. ハリヨノ（インドネシア・ガジャマダ大学）
「ボロブドール遺跡について」

4　国際交流
○　事業計画「都市文化創造において歴史的都市の文化伝統が果たす役割に関する比較研究」を推進するために，井上浩一，松村國隆，中野耕太郎をそれぞれ，イスタンブール，トリエステ，バンクーバーに派遣した（前掲）。
○　COE研究員の山崎覚士は，華東師範大学（上海）に派遣された。滞在期間は平成15年9月2日から平成16年2月28日まで。COE上海・サブセンター（同大学田家炳教育書院4階に設置）を拠点として，塩官鎮，同里鎮，杭州，寧波などを調査し，かつ井上徹の調査（後掲）に随行した。また，事業計画「都市文化創造において歴史的都市の文化伝統が果たす役割に関する比較研究」で刊行する報告書（前掲）に，港湾都市寧波に関する論文を寄稿した。
同じくCOE研究員の図師宣忠は平成15年12月26日，ロンドンのサブセンターに派遣され，平成16年1月16日，帰国した。
○　井上徹は上海と広州に派遣された。派遣期間は平成15年12月2日から同23日まで。上海では華東師範大学逸夫楼に滞在し，COEと華東師範大学による共同シンポジウム「中国の現代性と都市知識人」で報告を行うとともに，上海市内，及び浙江の烏鎮，江蘇の無錫市，蘇州市，洞庭東山などに所在する明清時代の文化施設を調査した。12月15日，広州に移動し，中山大学を拠点として，広州市内，及び仏山市，羅崗の宗族施設を調査した。
○　COE研究員として，楊振紅（中国社会科学院歴史研究所副研究員）を受け入れた。受け入れ期間は12月7日～3月31日。研究テーマは漢～唐代の都市社会史であり，中国社会科学院との連絡役をつとめる。同じく韓茂莉（北京大学都市環境学研究所教授）の受け入れ期間は平成16年3月6日～3月13日である。専門は都市地理学及び満州族の研究である。
○　来年度後期において復旦大学歴史系教授・呉松弟を招聘する計画を審議中。

5　その他
○　COE研究員岩宮隆司は，奈良民俗学博物館就職（7月1日付）に伴い，研究員を退いた。
○　第16回運営委員会会議において，広川禎

秀，岸本直文，中野耕太郎をＡチームの事業推進協力者とすることが決定された。

6　今後の活動計画

本年度1月～3月期の活動計画は次の通りである。

(1) 第16回研究会を開催。この研究会では3月20・21日開催予定のシンポジウム（後掲）におけるメインの報告者の主要著作を取り上げて，書評を行う。

日　時：1月31日（土）　13:30～17:00
会　場：大阪市立大学法学部棟
　　11Ｆ711C
書評1：塚田孝（大阪市立大学）
吉田伸之著「巨大城下町――江戸」（『巨大城下町江戸の分節構造』，山川出版社，2000年）
同著「江戸の普及」（『身分的周縁と社会＝文化構造』，部落問題研究所，2003年）
書評2：井上徹（大阪市立大学）
岸本美緒著「明末清初の地方社会と『世論』――松江府を中心とする素描――」（『歴史学研究』573号，1987年）
同著「明清時代の身分感覚」（『明清時代史の基本問題』，汲古書院，1997年）
書評3：町田哲（大阪市立大学）
塚田孝著「アジアにおける良と賤――牛皮流通を手掛かりとして――」（『近世身分制と周縁社会』，東京大学出版会，1997年）
同著「近世大坂の都市社会と文化」（『アジア都市文化学の可能性』，清文堂，2003年）

(2) 第17回研究会を開催。

日時：2月22日（日）13:00～17:00
会場：大阪市立大学法学部棟
　　11Ｆ711Ｃ
COE研究員（遠藤，大村，渡辺，森下，図師）の報告を中心として座談会を開催。
中国社会科学院歴史研究所副研究員・楊振紅の発表。

(3) 第18回研究会は，国際シンポジウムとする。

日　時：2004年3月20日（土），21日（日）
会　場：大阪市立大学学術情報総合センター　10Ｆ大会議室
テーマ：「東アジア近世都市における社会的結合――諸身分・諸階層の存在形態――」
報　告：
吉田伸之（東京大学）
「都市民衆世界の原景」
塚田孝（大阪市立大学）
「近世後期大阪における都市下層民衆の生活世界」
ギョーム・カレ（フランス国立社会科学高等研究院）
「役の周縁――金沢銀座の従業員について――」
佐賀朝（桃山学院大学）
「近世近代移行期における大阪の都市下層社会」
岸本美緒（東京大学）
「明末の都市雑業層と身分問題」
井上徹（大阪市立大学）
「郷紳をめぐる都市の諸関係――明末の広州府を中心として――」
定宜庄（中国社会科学院歴史研究所）
「清代北京における庶民生活」
金炫榮（韓国国史編纂委員会）
「近世朝鮮の地方都市＝邑治の空間構成と社会的結合」
(以上の発表題目はともに仮題である)
コメント：大黒俊二・脇村孝平（大阪市立大学）

(4) 国際交流

○　3月開催の国際シンポジウムにおける発表者であるギョーム･カレ，定宜庄をＡチームの招聘研究者とする。
○　平田茂樹は，2月19日から3月7日まで，北京，上海，杭州に派遣された。

Ｂチーム「現代都市文化研究」の活動

山野　正彦

平成15年7月以降のＢチームの活動報告を以下に記す。

(1) メンバーの追加と移動

新たに事業推進協力者として進藤雄三教授，土屋礼子助教授，木村好美講師（以上社会学），添田晴雄助教授（教育学），中生勝美助教授（アジア都市文化学）が，またCOE研究員として学振特別研究員に採用された高畑幸（社会学）がＢチームメンバーに加わった。なおCOE研究員鈴木康予は研究テーマの都合でＣチームに移動した。

(2) 研究会・講演会の開催

平成16年1月までに開催された研究会は下記のとおりである。

第13回研究会

日時：平成15年9月9日（火）15：00〜18：00
報告：山野正彦（地理学）
「古都キャンディの景観と文化」
終了後運営委員会開催

第14回研究会

日時：平成15年9月18日（木）10：30〜12：00
講演：トゥリヨノ・ブラマンティヨ（インドネシア国立芸術大学上演芸術学部長）
「都市文化の創造——関西におけるアジア音楽の展開, 特にガムラン音楽を中心に」（英語・日本語解説あり）

第15回研究会

日時：平成15年10月22日（水）15：30〜18：00
報告：岸政彦（社会学・博士研究員）
「戦後沖縄の労働力移動と経済的要因——『過剰移動』論へのアプローチ」
終了後運営委員会開催

第16回研究会

日時：平成15年11月13日（木）15：00〜18：00
報告：サイラル・アリミィ（ガジャマダ大学人文学部）
「格言の国際的な類似性についての仮説」
終了後運営委員会開催

第17回研究会

日時：平成15年12月17日（水）10：00〜12：00
報告：高畑幸（社会学・COE研究員）
「大都市繁華街における民族関係——名古屋市中区のフィリピン人ニューカマーと地元町内会を中心に」
終了後運営委員会

第18回研究会

日時：平成15年12月22日（月）14：00〜17：00（Aチームとの合同講演会）
講演　1：ククジェ・カンタマラ（チュラロンコン大学芸術学部）「タイの仏像彫刻」
2：ティンブル・ハリヨノ（ガジャマダ大学人文学部長）「ボロブドール遺跡について」

第19回研究会

日時：平成16年1月13日（火）11：00〜12：00
（運営委員会）「平成17年度事業計画について」

(3) 海外での活動

チームメンバーの多くはそれぞれ上海，バンコク，ジョクジャカルタの3つのサブセンターを基地として，華東師範大学，チュラロンコン大学，ガジャマダ大学，インドネシア国立芸術大学のメンバーと共同で，都市研究，環境モノグラフ調査等を精力的に行っている。SARSの流行による渡航困難のために今年度前半中止を余儀なくされた上海での共同研究は，華東師範大学とのプロジェクト再開の合意にしたがって，教育，都市景観等の具体的な研究に着手している。中川・山野・石田がインドネシアやタイで実施した，サウンドスケープなど文化表象の諸相に関する調査資料を収録した成果報告書が準備されている。また谷が韓国の研究者と共同で実施した都市民の生活意識調査の成果報告書が韓国で刊行された。メンバーの具体的な出張日程は次のとおりである。(氏名，出張期間，渡航先国名，目的の順に記載)

中川眞
7月10日〜19日
タイ・インドネシア
サブセンター駐在，研究打ち合わせ，フォーラム報告書編集

橋爪紳也
7月15日〜19日
タイ
研究打ち合わせ
第2回フォーラム開催準備

石田佐恵子
8月18日〜9月9日
インドネシア
環境モノグラフ調査（ビデオ映像交流プロジェクト）

豊田ひさき
10月16日〜20日
中国
華東師範大学との研究打ち合わせ

水内俊雄・中生勝美
10月16日〜22日
中国
華東師範大学との研究打ち合わせ

山野正彦
10月26日〜11月9日
タイ

サブセンター駐在・運営，環境モノグラフ調査（仏教寺院壁画・絵図調査）
二階堂裕子（COE研究員）
10月31日～11月3日
大韓民国
多文化共生と生活意識調査
中川眞
11月26日～1月11日
インドネシア・タイ
環境モノグラフ調査（サウンドスケープ調査），サブセンター駐在・運営，バンコクフォーラム参加
中生勝美
11月28日～12月4日
中国
上海市調査，華東師範大学法政学院との研究打ち合わせ
添田晴雄・木原俊行
11月29日～12月2日
中国
華東師範大学教育科学学院との研究打ち合わせ
水内俊雄・神田孝治（COE研究員）
11月30日～12月4日
中国
上海都市再開発調査，研究打ち合わせ
橋爪紳也
1月8日～12日
タイ
第2回バンコクフォーラム参加
原口剛（COE研究員）
1月8日～26日
タイ
バンコクフォーラム参加，サブセンター駐在，都市スラム調査
山野正彦
1月25日～2月4日
タイ・インドネシア
サブセンター駐在・運営，環境モノグラフ調査，第2回ジョクジャカルタフォーラム参加
中川眞・石田佐恵子
1月25日～31日
インドネシア
第2回ジョクジャカルタフォーラム参加
谷富夫・岸政彦（博士研究員）
1月27日～31日
インドネシア
第2回ジョクジャカルタフォーラム参加
多和田裕司
1月27日～2月5日
インドネシア
第2回ジョクジャカルタフォーラム参加

(4) 海外からの招聘研究者と学術拠点交流

Ｂチーム関係（タイ・インドネシアから）の招聘研究者は次のとおりである。いずれの方も研究会で報告もしくは講演していただき，相互交流を深めている。

トゥリヨノ・ブラマンティヨ（Triyono Bramantyo）
インドネシア国立芸術大学上演芸術学部長
8月20日～9月20日
サイラル・アリミィ（Sailal Arimi）
ガジャマダ大学人文学部助手
9月22日～16年3月20日
パタラワディ・プチャダピロム（Patarawdee Puchadapirom）
チュラロンコン大学芸術学部教員
16年1月6日～3月31日

このほか16年3月6日～20日にチュラロンコン大学から都市設計教育センターのバナソピット・メクヴィチャイ（Banasopit Mekvichai）所長が招聘研究者（客員教授）として来学される予定である。

なお大阪市立大学とタイ，インドネシアの相互交流網を形成・強化するための事業として，タイからインドネシアへ，インドネシアからタイへの研究者相互訪問を実施した。12月にチュラロンコン大学芸術学部のブッサコーン助教授がジョクジャカルタのガジャマダ，インドネシア国立芸術大学を訪問し，サブセンターで日本，タイ，インドネシアの共同研究について意見交換を行った。3月にはインドネシア国立芸術大学のヘルミン副学長がチュラロンコン大学を訪問する予定であり，それにあわせて中川教授がバンコクに出張予定である。

Ｂチームの研究活動の特徴ともいえるサブセンターを基地としての現地調査が，特に上海に関して今期はSARSの流行という思いがけない出来事によって十二分に行い得なかった恨みがある。次期に向けてより活発な調査活動と成果の刊行を計画中である。

講　演：都市文化としてのタイ伝統音楽

水谷　清佳

講演者：Assit. Prof. Bussakorn Sumronthong

（Faculty of Fine and Applied Arts, Chulalongkorn University）
日　時：2003年2月19日
場　所：文学棟208号室

COE招聘研究者として滞在中のチュラロンコン大学芸術学部副学部長で民族音楽学者，音楽家のブッサコーン・サムロントン助教授によるタイ伝統音楽の講演は，タイ音楽の演奏家である福田明子氏を講演アシスタントとして行われた。

初めに司会進行を務める中川眞教授からブッサコーン助教授，福田氏の紹介が行われた。ブッサコーン助教授はタイの伝統音楽の研究家で，ラナートエーク（木琴のような鍵盤打楽器）の演奏者でもある。近年はタイの伝統音楽を使用した音楽療法の研究も行っている（音楽療法については3月4日の講演報告分を参照）。氏はチュラロンコン大学教育学部の音楽教育学専攻を卒業後，ヨーク大学で修士・博士課程を修了した。チュラロンコン大学専任講師を経て1993年から助教授を務め，現在に至る。アシスタントの福田氏はチュラロンコン大学に4年間留学し，氏に師事してラナートエークを学んだ。現在は日本やタイで活発に演奏活動を行っている。

本講演は大きく3部に分かれた。1. 氏のバックグラウンドを明らかにするため，ラナートエークの実際の演奏を交えながらのタイ伝統音楽の概説，2. タイ音楽と社会との関連性について（この場合のタイ音楽とは伝統音楽をさす），3. 都市文化の中におけるタイの伝統音楽，伝統音楽とポップスの関係，タイ音楽の創造性や教育の問題などの話となった。

ブッサコーン助教授は，まず初めに福田氏をモデルとして“外国人がどのようにラナートエークを習うか”を再現しながら，タイ音楽の特徴を説明した。氏は演奏を行なう前の二つの重要なポイントを指摘した。第一は師を尊敬することである。師に鄭重に教えを乞い，必要としていることを伝えることが大切である。決してお金を払うから教えてもらえるわけではない。第二は座り方である。タイの音楽はインドから渡ってきたもので，人間ではなく神が作った神聖なものである。楽器には神が宿っているため，敬意を表してから向かう。座り方は背筋を伸ばし，両足を揃えて横座りをしてから演奏の基本姿勢となるあぐらをかく。右足を曲げ，重心に力を入れて，頭の先にまで力が行き届くようにする。氏はこれをブッダポーズと称した。ここで数人の聴衆がこのポーズを試みた。

ラナートエークを叩くバチは2種類あり，硬い音の出るものと，柔らかい音の出るものがある。バチの持ち方は4種類あり，バチを持った指の形を鳥のくちばしに見立て，全て鳥の名前がついている。“バッカー”（カラス），“バッカイー”（鶏），“ノッエウー”（オウム），“ノッファン”（ウッドペッカー）である。打法は鍵盤（木製の音板）を叩いた後，素早く放すことである。実演の際，鍵盤の裏についているチューニング用材が外れるハプニングが起こった。日本の寒さと，極度の乾燥が原因だという。チューニング部分は蜜蝋と鉛の混合物でできているのだが，それをライターで溶かして再び接着する。接着後はややピッチが下がるそうだ。

タイ音楽の練習はユニークだがスポーツのように厳しい。ラナートエークの練習は屋外が基本で，海辺を走ったり，楽器の代わりにココナッツを使用して割れるまで叩く練習を行う。昔の歌の練習では，高い所から海に飛び込み，叫び声をあげることが発声練習のひとつであったという。パーカッションの場合は，水面を叩いて練習をする。

ここでブッサコーン助教授によるラナートエークの演奏をお聴きした。氏は楽器を拝んでから演奏を始めた。頭から指先まで体中に力のこもった姿勢から，小さく丁寧な音色が響いてきた。「演奏することは簡単で覚えるのも難しくない。しかし上手く演奏することは非常に難しく体力を使うことだ。特に小さな音で演奏することは力を要する」と述べた。その後福田氏が，ラナートエーク，ラナートエークより少し大きいラナートトゥム，こぶのついたゴングが円状に並んでいる楽器コンウォンヤイとコンウォンレクの即興演奏を実演した。

次に，伝統音楽の運用方法について議論が進んだ。氏は聴衆に日本の伝統音楽は日常の生活のなかでどのように用いられているのかを問うた。日本の雅楽は祭り，神社，王室，正月，結婚式などで使われるが，建国記念の日や町の記念日には演奏されないことに氏は驚いた様子であった。タイの結婚式でも伝統的な音楽だけではなく，ポップスやジャズも使用するという。その後，タイの伝統的な結婚式，伝統行事について話が展開した。

最後にタイ音楽の教育方法についての質問が活発に行なわれた。「小学校のカリキュラムを例に，タイの音楽教育はどのように行われているか」という質問に，ある学校では西洋音楽をやるようにサポートしているところもあるが，基本的にタイでは西洋音楽かタイ音楽かを子供自身に選択させると述べた。氏は幼稚園や小学校でもレクチャーを行っており，教育方法の一例として，子供に手拍子を打たせ，氏がラナートエークをともに演奏する方法を実演した。

逆に氏から「日本ではどのように伝統音楽を教えるのか」という質問がなされた。それに対し日本の学校には伝統楽器がないことや，教員が伝統楽器や音楽の教え方を知らないことが問題点としてあげられた。氏によると，タイでは政府のサポートがあり，伝統音楽教育は非常に大切にされている。学校では全種類の楽器が揃っているという。

最後に，氏はタイの笛で「さくら」を演奏した。「さくら」は西洋音楽の音階のため，タイ音楽の音階とは外れる音がある。その演奏を受けて，「西洋音楽とタイ音楽の音階（西洋音楽は半音階と全音階になっているが，タイ音楽は均等に分かれている）はずいぶん違うが，子供はどうやって認識し，憶えるのか」という質問がなされた。それに対し氏は，子供は双方を理解しているから大丈夫だと述べた。しかし福田氏は，自らの経験から「最初は困った。日本人を含めて，西洋音楽を背景にもっている人は困るのではないか」と述べた。

都市文化としてのタイ伝統音楽についての議論は，時間の都合で教育の部分のみに終始したが，現代に生きる音楽文化としてのタイ音楽の多様な側面を知る端緒となった講演であったといえるだろう。

講　演：タイ音楽と社会的文脈―音楽療法の観点から

水谷　清佳

講演者：Assist. Prof. Bussakorn Sumronthon
（Faculty of Fine and Applied Arts, Chulalongkorn University）
日　時：2003年3月4日
場　所：文学部棟355号室

はじめに

COE招聘研究者であるチュラロンコン大学・ブッサコーン・サムロントン助教授による音楽療法を中心とする講演が，COE拠点リーダーの阪口弘之文学研究科長（当時）の「今回，相互の研究をぶつけ合うことができることを嬉しく思う」という挨拶ののち，中川眞教授の司会によって始まった。この交流の端緒はブッサコーン助教授と中川教授が7～8年前にメールで通信を交わしたことに始まる。本講演は音楽療法を主なテーマとするが，その理解の助けとして，初めにタイの伝統音楽が紹介された。氏が携わっている音楽療法は，タイの伝統楽器を使うことを特徴としているからである。

1　タイの伝統音楽について

まずブッサコーン助教授はタイの伝統楽器による「さくら」の演奏のテープを流した。タイではもらったら返すという‘ギブアンドテイク’の文化があるという。氏は2000年に日本政府の援助によって，広島大学での国際会議に出席することができた。また，タイの通貨危機の時にも日本政府は沢山の経済的援助をしてくれた。そこで氏は，日本政府へのお返しとして，タイ伝統楽器による「さくら」を作曲したのである。氏はこの曲を世界各国で演奏し，日本への感謝の気持ちを伝えているのだという。

タイの音楽では師を尊敬することが重要であり，金銭は重要ではない。タイ音楽を学ぶためには，師の家に住み込んで共同生活を行う。互いを全く知らない状態では教わることができないからである。さらに音楽の神と師に対して捧げ物をする。まずは自分の知性を高めるために神に6バーツ（18円）程度の花を捧げ，師に徒弟の意を表すために白い布を捧げる。入門後，座り方や楽器の構え方を教わる。最初は鍵盤が見えないように布をかけて練習を行う。鍵盤を見ずに叩くことによって，キーの感覚を身体で覚えるためだ。その練習方法も流派によって様々である。水の入った入れ物を頭に乗せて，それが落ちないよう手首以外を静止させて演奏する方法をとる流派もあるという。ここで氏から日本の邦楽の場合はどうかという質問がなされた。フロアからは，タイと同じように師を尊敬し住み込みで学ぶ例もあるという返答があった。

次に，様々なタイプのアンサンブルをテープで聴いた。第1は太鼓，ラナートエーク，歌唱によるアンサンブル。第2は弦楽器5種類，笛によるアンサンブル。第3は硬いバチによるラナートエークのアンサンブル。第4はタイのオルガンによるアンサンブル。第5はダンス音楽のアンサンブル。第6は歩きながら踊るアンサンブル。第7はラーマーヤナのダンス音楽のアンサンブル。第8は中国音楽をタイの楽器で演奏したアンサンブル。最後に太鼓を使用したマラヨーというアンサンブルである。タイ音楽も地域によって異なることが，これらの例によって示された。

2　音楽療法について

音楽療法における音楽の使われ方は様々であるが，氏は日本の「赤星式音楽療法」を研究の基盤としている。赤星式音楽療法の創始者である赤星建彦氏は1977年に東京で音楽療法を開発した。赤

星氏は何千人もの患者のために尽くしてきた人物だという。赤星氏は障害者が片手でも音楽演奏を行える「ミュージックテーブル」というものを発明した（ヤマハがそれを真似て製品化したというエピソードがある）。15年前に赤星氏がチュラロンコン大学病院で実際に音楽療法を始め，赤星式音楽療法がタイに持ち込まれた。それをきっかけに，氏はタイ音楽による音楽療法を研究することとなった。赤星式とタイ音楽を合わせて行われたこの研究が，二つの文化の相同性を表すことにもなろう。

氏はタイ政府から援助金を受け，赤星式のタイ音楽への適応可能性について調査を始めた。調査内容は，筋肉の病気を持った人に対して療法を行い，療法前・後の違いを明らかにすることである。赤星式では木琴，カスタネット，鈴を使用する。それに対しタイの伝統楽器はラナートエーク，グッポウン，アンクルンを使用する。赤星式とタイ楽器による方法では，楽器の微妙な違いによって結果が異なることが明らかになった。例えば，木琴とラナートエークでは演奏者と鍵盤の近さが異なるため筋肉の使用形態が異なる。カスタネットとグッポウンの場合は，指先の力の入れ方に違いが生じる。鈴の場合は，楽器自体の重さと演奏方法による違いがある。その結果，自国の音楽の経験があるという点で，タイ人にとってはタイの楽器を使用する方が良い効果が得られることを明らかにした。氏は赤星式をタイ風に読み替えて行うことに意味があると指摘した。

3　質疑応答

質疑応答では活発な議論展開がなされた。主要なものを以下に示す。

Q：赤星式音楽療法はタイ風に改めて普及しているのか，それともオリジナルの赤星式が取り入れられているのか？

A：赤星氏はタイに直接教えに来たので基本的にオリジナルな赤星式が普及している。また，タイにはCDを聞かせる程度の音楽療法はあるが，赤星のような音楽療法はなかった。

Q：あなたは日本での様々な音楽療法を今回の訪日で体験したが，その印象はどうだったか？

A：関西のいくつかの音楽療法の拠点を訪れたが，赤星氏には医師との協力作業の蓄積が遙かにあるため，最善の方法に達していると思う。日本の療法家は多くアメリカやイギリスで音楽療法を学んでいるが，赤星氏は独自の方法を生み出した。各国には様々な音楽療法があるが，日本が自文化に根付いたものを行わないことは残念である。

Q：今回のレクチャーでは楽器が身体に障害のある人に効果があるという話であったが，音楽を使うということは精神にも結びつく。特定の文化の中の楽器を使うということは，精神的な面にどのような影響を与えるのか？

A：人間の身体はその文化の中で馴染んでいく。赤星式では日本の患者に対し，日本の音楽を聴かせ，楽器を使って身体の状態を良くしていった。その国の人がその国の音楽を使うことが患者の精神に良いとされる。さらに研究にはオリジナルなものとして瞑想を取り入れている。この場合の瞑想とは座って行うだけのものではなく，歩きながらや言葉を聞きながらのものがある。

Q：日本の場合，セラピーというと癒しのイメージがあるが，身体と精神の相関性ではどうか？

A：楽器を演奏するということだけにこだわるのではなく，楽器を触ることを通して身体をケアし，音楽を聞くことで精神面をケアする。障害を持った方は楽器を持たなくても，音楽を聞くだけでも楽しめ，これは彼らにとって良い薬になる。

Q：日本人の障害者に対してタイの音楽療法を行うとどのような結果が出るか？

A：健常者ならば外国の音楽を聞いても感じるものはあるだろう。しかし，重度の障害を持った人にとっては，タイ音楽の経験がないと難しいのではないか。逆にタイ人に日本の音楽を聞かせても，これまで日本音楽を体験していないため，その音楽に入っていくことはできないだろう。

Q：仏教音楽はどうか？

A：仏教音楽では怖がられてしまう。

Q：あなたは音楽家であって，医者ではないから医療的な面はどうするのか？

A：この研究はまだ始まったばかりのものであるが，現在は心理学の先生と一緒に研究を行っている。

Q：音楽療法の実際のやり方は？

A：マンツーマンで30分～1時間くらい取り組む。

以上で予定の1時間30分を軽くオーバーしてしまう熱気に溢れた交流となった。障害をもつ人々の視点から，異文化の理解について考えてみる，またとない貴重な機会になったと思われる。

Ｃチーム「都市の人間研究」の活動

高梨　友宏

平成15年8月～平成16年1月のＣチームの活動について以下に報告する。

1　構成員

Ｃチームの構成員は本誌前号所記以降さらに拡充された。はじめに平成16年1月現在の構成員を紹介しておこう（リーダーを除き，所属専修順）。

事業推進担当者：金児曉嗣（チーム・リーダー，心理学），阪口弘之（拠点リーダー，国語国文学），小林道夫（哲学），山口久和（中国語中国文学），芝原宏治（言語情報学），三浦國雄（アジア都市文化学）

事業推進協力者：高梨友宏（哲学），伊藤正人（心理学），大場茂明（地理学），金光桂子（国語国文学），張新民（中国語中国文学），山崎弘行（英語英米文学），杉井正史（同），田中孝信（同），松村國隆（ドイツ語ドイツ文学），田畑雅英（同），小西嘉幸（フランス語フランス文学），中島廣子（同），津川廣行（同），福島祥行（同），井狩幸男（言語情報学），荒木映子（表現文化学），三上雅子（同），野崎充彦（アジア都市文化学），大澤慶子（大学教育研究センター）

COE研究員：河野由美（心理学専修），渡部美穂子（同），向井有理子（同），佐伯大輔（同），内藤由佳子（教育学専修），名和久仁子（国語国文学専修），劉慶（同），鈴木博子（同），竹下幸男（英語英米文学専修），出口菜摘（同），北原博（ドイツ語ドイツ文学専修），大窪優子（フランス語フランス文学専修，平成15年11月よりフランスに留学中），鈴木康予（中国語中国文学専修），王標（同），バーバラ・クロス（ロンドン大学SOAS=アジア・アフリカ研究学院，滞日期間：平成15年11月19日～平成16年1月10日），エヴァ・カミンスキー（ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室，滞日期間：平成15年9月15日～平成16年1月14日）以上，総勢41名である。

なお，学内事情により，平成15年11月以降，当面，阪口弘之教授が金児チーム・リーダーの代行をつとめることとなった。

2　主な研究事業

平成15年8月以降，平成16年1月までに行われたＣチームの主な研究事業は次の3点である。

1）平成15年度 インターナショナル・スクール（平成15年9月24日～27日）
2）シンポジウム「都市とフィクション」（平成15年9月30日～10月1日）
3）大型調査研究プロジェクト「都市住民と村落住民の生活様式と価値観」の推進

以下，それぞれについて若干の説明を付す。

1）について。「インターナショナル・スクール」は「都市文化研究センター」に附属する国際教育研究組織であるが，初年度にあたる平成15年度は，アンドリュー・ガーストル教授（ロンドン大学），ローラント・シュナイダー教授（ハンブルク大学），ユーディット・アロカイ助教授（同），エヴァ・カミンスキー氏（同），イェルク・クヴェンツァー氏（ドイツ『恵光』日本文化研究センター），ロベール・リュケンヌ氏（フランス国立極東学院），北川扶生子助教授（鳥取大学）ら，Ｃチームの共同研究事業と関係の深い招聘講師および阪口弘之教授により，オムニバス形式の集中講義「比較文化研究論Ｉ」として上記期間中に開講され，毎日60～70名の受講生（若干の学外者を含む）が詰めかける活気に満ちた授業が行われた。最終日には，文学部創立五十周年記念行事の一環でもある，上記講師らによるシンポジウムが開催され，100名を超える参加者があった。なお，詳細は，『文学研究科叢書』に掲載予定の小林直樹助教授（本学大学院文学研究科）による報告を参照されたい。

2）について。芝原宏治教授および田畑雅英助教授によってオーガナイズされたＣチーム主催の国際シンポジウム「都市とフィクション」は，予定通り上記日程において開催され，多数の参加者と活発な討議を得て，大きな成功を収めた。パネリストとして，本シンポジウムのために招聘されたスティーヴン・ドッド助教授（ロンドン大学），先のインターナショナル・スクールでも講師をつとめられたユーディット・アロカイ助教授（ハンブルク大学），平成15年4月より1年の予定で滞日中の本学研究員，ニコル・クリー氏（同），また本学からはＣチーム事業推進協力者の中島廣子教授，同・三上雅子助教授，同・杉井正史助教授，同・田畑雅英助教授，イアン・リチャーズ助教授（通訳として山崎弘行教授がサポート），COE研究員の劉慶氏，同・北原博氏，同・出口菜摘氏，同・鈴木康予氏，同・竹下幸男氏，以上計13名を擁する大規模な国際的シンポジウムであった。詳細は，芝原教授および田畑助教授による「シンポ

ジウム『都市とフィクション』報告」および総252頁からなる大部の『都市とフィクション 大阪市立大学大学院文学研究科COE国際シンポジウム 報告書』（『都市とフィクション』編集委員会編）に譲るが，各パネリストがそれぞれの研究領域に定位しつつ「都市」と「フィクション」がクロスする場に焦点を絞って展開した報告内容は，どれも刺激的であった。とりわけ印象的であったのは，初日に芝原教授とともに司会進行役をつとめた田畑助教授の，一見多方向に拡散するかに見えたそれぞれの報告内容から，いくつかの内的連関を取り出して見せた見事な総括と，二日目のCOE研究員諸氏によるシンポジウムでコメンテイターをつとめたドッド，アロカイ両助教授の，広い知見に裏打ちされた懇切なコメントであった。後者はときに，外国人として異文化を研究する際の姿勢や意識といった原理的な問題にまで踏み込む場面も見せて，深い示唆に富むものであった。シンポジウムの「質」は司会進行役のまとめ方に大きく左右されるといわれるが，その意味でも，本シンポジウムの成功が，単に集客数といった量的契機のみによって測られるものではなく，高度の質という点でも十分裏付けられたものであったと言えるだろう。

3）について。前号でも報告したように，金児曉嗣副学長を中心に心理学専修のCOE研究員諸氏他によって推進されている大規模な調査研究「都市住民と村落住民の生活様式と価値観」は，当初大阪市立大学プロジェクト研究として採択されたが，テーマの親近性ゆえに，後に当COE研究事業の一環としても位置づけられることとなったものである。平成15年3月に行われた大規模なアンケート調査のデータは現在もなお解析が進められつつあるが，その成果の一端が，Ｃチーム第15回研究例会（平成16年1月16日）において紹介され，活発な質疑応答がなされた。報告者と報告タイトルについては，後述の「4 研究例会活動」の項目を参照されたい。また，本研究の内容の詳細は，本誌掲載の渡部美穂子COE研究員・金児曉嗣副学長の共同執筆になる論文「都市は人の心と社会を疲弊させるか？」を参照されたい。なお，本研究は今後さらにロンドンおよびハンブルクにも拡大されて推進される予定である（渡部氏の「ロンドン・サブセンターについて」および向井氏の「ハンブルク・サブセンターについて」に関連記事があるので併読されたい）。都市と非都市の生活意識をめぐる大規模な調査研究からいかなる知見が導出されるか，本研究の成果には，Ｃチーム内はもとより，外部からも引き続き大きな期待が寄せられている。

3 サブセンターへの派遣事業

主としてＣチームが実務運営に携わっているロンドンおよびハンブルクのサブセンターは，この間，数名の派遣者によって有効活用された。それぞれの派遣者が，先方大学との共同研究の萌芽をつかみ，人的交流を深めつつある。詳細については，金光講師および渡部，出口，北原，向井の各COE研究員から寄せられた「ハンブルグ・サブセンターについて」等を参照されたい。

なお，各氏からの報告に関連して，若干の指摘と補足説明を付したい。

まず，図書館の利用について。ロンドンに派遣された出口氏およびハンブルクに派遣された北原氏から，それぞれ図書館の利用に関する報告があった。ロンドンとハンブルクの間には，国情の相違を反映した違いが見られるものの，いずれの場合も，公的機関に属する図書館を利用するためには，研究者であることの身分証明が必要であろう。先方大学の配慮によって，この問題が解決するケースが多いとは思われるが，今後派遣されるCOE研究員の身分証明に関しては，COE本部および本学によっても事前の配慮がなされることが望まれる。

次に，コンピュータの保全について。10月にハンブルクに派遣されたCOE研究員の向井氏には，平成15年の8月来世界に蔓延したコンピュータ・ウィルス禍に対する対策として，同地サブセンターのパソコンにウィルス・ワクチンを導入するなどの作業に従事してもらった。ハンブルク大学内に設置されたハンブルク・サブセンターのパソコンは大学のコンピュータネットワークに接続されているため，端末機の健全性の保持は，先方大学に迷惑をかけないためにも，常に優先的に考慮されるべき要件である。

ところで，上記のように，今回は数名の派遣者が確保できたものの，ロンドン，ハンブルクいずれのサブセンターの場合でも，利用（派遣）の希望は大学の長期休暇期間中に集中する傾向を有し，学期間中の利用者を不断にかつ平均的に確保することが困難であった。前号活動報告で指摘したこの問題は依然として未解決のままである。このことの背後に，一つには次のことが考えられる。すなわち，Ｃチームの構成員には語学の授業を担当する教員・研究員が多く含まれるが，その場合，語学の授業は教育効果の点から休講措置をとることが難しいため，学期

中の出張は断念せざるをえなくなるという，構造的な問題が存在することである。もとより，非語学系教員・研究員にとっても，授業ノルマの確保は等閑にできない問題である。サブセンター運営の健全化と維持のためには，学期中の派遣・出張を円滑ならしめるバックアップ体制の検討・整備が急務であると思われる。

以下，本誌前号に掲載した情報とやや重なるところがあるが，計画が変更された部分も含まれるため，本報告にかかわる期間中の派遣事業について，改めて以下にまとめておく（敬称略）。

金光　桂子　平成15年6月1日～7月31日
　　ハンブルク
渡部美穂子　平成15年7月22日～8月31日
　　ロンドン
北原　　博　平成15年7月28日～8月27日
　　ハンブルク
出口　菜摘　平成15年8月7日～9月20日
　　ロンドン
向井有理子　平成15年10月21日～12月5日
　　ハンブルク

なお，前号に記載したCOE研究員・内藤由佳子氏のハンブルク出張予定は，諸般の事情により，延期されることとなった。

また，今後の予定として，栄原永遠男教授（COE事務局・Ａチーム），芝原宏治教授（事業推進担当者），田中一彦助教授（COE事務局）の三名が平成16年2月16日から20日まで，ロンドン・サブセンターに派遣された。

4　研究例会活動

Ｃチームの研究例会活動は原則として月1回のペースで行われることになっているが，夏期休暇や諸般の学内事情等のため，必ずしもこのペースを守ることができなかった。ただし，平成15年10月に大幅な構成員拡充が行われたため，今後の研究例会の充実は従前にもまして見込まれるであろう。

さて，ここで特記すべきは，次の2点である。

まず，ロンドン大学のガーストル教授が中心となって進められている大英博物館での上方役者絵の特別展への協力研究としての，阪口弘之教授の「在欧日本古典関係資料の総合的調査」に関連するシンポジウム「都市文化と芸能興行」が，研究例会の枠内で，Ａチームと合同する形で（Ｃチームとしては「第11回研究例会」に当たる）開催されたことである。本シンポジウムにおける神田由築助教授および鈴木博子氏の報告は本誌に掲載されているので，詳細については当該論文を参照されたい。

次に，ロンドン大学およびハンブルク大学からそれぞれCOE研究員として招聘された，バーバラ・クロス氏（ロンドン大学SOAS）およびエヴァ・カミンスキー氏（ハンブルク大学アジア・アフリカ研究科）との研究交流である。両氏は，下記の「第13回研究例会」において，日本文化に関する該博な知見とその研究成果の一端を日本語で披露され，これに続いて活発な質疑応答が展開された。特にカミンスキー氏による，現代都市生活を機軸とした異文化理解の根本問題にかかわる問題提起は，分野を越えた幅広い関心を誘発するものであった。またクロス氏は国語国文学教室，カミンスキー氏はドイツ言語文化教室を中心にそれぞれ広範な人的交流をもち，短い滞在期間にもかかわらず，充実した成果をあげられた。同じことが本チーム，ひいては本研究科にとっても言えよう。両氏との研究交流の芽が，研究上の国際的パートナーシップという名の大木へと育ちゆき，やがて豊かな成果を実らせることを願ってやまない。

以下，本誌第2号所記以降の研究例会活動の記録を記す。

第11回研究会（Ａ，Ｃ両チーム合同シンポジウム）

日　時：9月20日（土）　13：30～
会　場：大阪市立大学・田中記念館
　　第2会議室
共通テーマ：「都市文化と芸能興行」：
研究報告
1. 神田由築（お茶の水女子大学）
　「都市文化と芸能興行――大坂を中心として――」
2. 鈴木博子（報告当時：国語国文学専修後期博士課程大学院生／現：COE研究員）
　「屋敷方での役者たち」

第12回研究会

日　時：10月8日（水）　16：30～
場　所：法学部棟6Ｆ第2会議室
出張報告
1. 渡部美穂子（COE研究員，心理学専修）
　「ロンドン・サブセンター出張報告」
2. 出口菜摘（COE研究員，英語英米文学専修）
　「ロンドン・サブセンター報告」
3. 北原博（COE研究員，ドイツ語ドイツ文学専修）
　「ハンブルク・サブセンター報告」

研究報告
1. 福島祥行（事業推進協力者，フランス語フランス文学専修）

「《劇場》のトポス――境界と都市――」
2. 井狩幸男（事業推進協力者，言語情報学専修）
「グローバルな視点から探る日本のバイリンガル教育」

第13回研究会
日時：12月17日（水）　16：30～
場所：1号館3Ｆ特別会議室
研究報告
1. 向井有理子（COE研究員，心理学専修）
「ハンブルク・サブセンター報告」
出張報告
1. バーバラ・クロス（COE研究員，ロンドン大学SOAS）
「式亭三馬と出版文化」
2. エヴァ・カミンスキー（COE研究員，ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所）
「用の美――都市の住文化と食文化における日本陶芸――」

第14回研究会
日時：12月22日（月）　16：30～
場所：法学部棟11Ｆ711Ｃ教室
研究報告
1. 田中孝信（事業推進協力者，英語英米文学専修）
「『エドウィン・ドルードの謎』：オリエントの誘惑」
2. 松村國隆（事業推進協力者，ドイツ語ドイツ文学専修）
「ヴァルターとウィーン宮廷」

第15回研究会（プロジェクト研究・Ｃチーム合同研究会）
日時：2004年1月16日（金）13:30～
場所：法学部棟6Ｆ第2会議室
全体テーマ:「都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴」
研究報告
1. 金児曉嗣（事業推進担当者，心理学専修）
「調査の目的と方法，都市民と村落民の宗教行動」
2. 河野由美氏（COE研究員，心理学専修）
「コミュニティ意識と宗教性」
3. 堀江尚子（本学文学研究科前期博士課程，心理学専修）
「ソーシャル・サポートの受容とネットワークの多層性」
4. 向井有理子（COE研究員，心理学専修）
「自尊心と異文化への態度」
5. 渡部美穂子（COE研究員，心理学専修）
「都市は人の心と社会を疲弊させるか？」

第16回研究会
日時：1月20日（火）16:30～
場所：法学部棟11Ｆ711C
研究報告
1. 山崎弘行（事業推進協力者，英語英米文学専修）
「W. B. イェイツと都市：身体の問題を中心に」
2. 荒木映子（事業推進協力者，表現文化学専修）
「モダニスト都市」

以上をもってＣチーム活動報告とする（なお，前号に記載した「運営委員会報告」は，各研究例会後に引き続いて行われた運営委員会が，事実上，センター会議の「連絡会」の形であったため，今回は省略させていただいた）。

シンポジウム「都市とフィクション」

芝原　宏治・田畑　雅英

大阪市立大学大学院文学研究科COE事業の一環として，国際シンポジウム「都市とフィクション」が，平成15年9月30日（火曜日）および10月1日（水曜日）の二日にわたって，大阪市立大学学術情報総合センター10階の会議室（第1日）および同センター1階の文化交流室（第2日）で行われた。パネリスト等の報告タイトルないし役割は次のとおりである。

9月30日（火曜日）
午前の部　10時00分～12時30分
・前近代日本の都市と異界……ニコル・クリー
・都市とモダニズム――阪神地区を中心に……三上雅子
・シェイクスピアとロンドン……杉井正史
・The City and the Growth of New Zealand Fiction: Janet Frame's 'Miss Gibson and the Lumber Room'
……イアン・リチャーズ（訳：山崎弘行）
午後の部　2時00分～4時50分
・中村圭爾文学研究科長挨拶
・江戸中後期における三都間の歌壇の対立

……ユーディット・アロカイ
・都市のフィクションと川――『隅田川』の系譜
……田畑雅英
・ジュール・ヴェルヌにおける空想の都市
……中島廣子
・あいまいな都市――梶井基次郎における自己と他者
……スティーヴン・ドッド
・全体討論

10月1日（水曜日）
午後3時00分～7時00分
・阪口弘之拠点リーダー挨拶
・説経の都市芸能化……劉　慶
・ゲーテの『ウェルテル』と門……北原　博
・1920年前後のロンドンとT・S・エリオット
……出口菜摘
・1930年代上海と張天翼『洋涇浜奇侠』
……鈴木康予
・1950年代以後の都市とW・ギブスン
……竹下幸男
・各報告へのコメント
……ユーディット・アロカイ，スティーヴン・ドッド

「都市とフィクション」というタイトルを選んだのは，都市においてif（もしも）と考えることの重要性を本シンポジウム企画者が強く意識したからであり，企画者が所属する領域においてそのifにつながるものを一言で表すとすれば，「フィクション」がもっともふさわしいと考えたからである。

両日とも，司会は芝原と田畑が務めたが，会場を巻き込むようにして行われた議論の活発さは，シンポジウム企画者でもある両司会者の予想を大きく上回るものであった。以下，両日の模様を簡単に記す。

第1日は，本学文学研究科の教員5名と，COEサブセンターが設置されているロンドン大学・ハンブルク大学から招聘された研究者3名（計8名）による報告と全体討論が行われた。ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室で学ぶクリー氏は，主として江戸時代の妖怪の出現する場や現れ方を，都市との関連において論じた。三上助教授は，宝塚少女歌劇の成立を創設者小林一三の近代都市文化イメージとの関連において論じ，そのフィクション性の持つ意味を考察した。杉井助教授は，ロンドンにおいて劇場が「リバティ」と呼ばれる特別行政区に建てられた事実が持つ象徴的意味を，シェイクスピアの『尺には尺を』のテクストとの照応においてとらえた。リチャーズ助教授は，ニュージーランド作家ジャネット・フレイムの短編「ギブソン先生と物置小屋」を取り上げ，移民の国ニュージーランドにおいて，ヨーロッパの文学形式を借用しつつ，自分たちの新しい国の現実に対応する文学を生み出していく過程を考察した。なお，この報告は英語で行われ，山崎弘行教授によって通訳された。

昼休みをはさんで，午後の報告が行われた。ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室のアロカイ助教授は，18世紀の京都・大坂・江戸の三都の各歌壇が相互に対立したり影響を与えあったりしながら，大きな和歌革新を成し遂げてゆく過程を論じた。田畑は，都市と川を結ぶ物語として，能楽『隅田川』を起点に，それが西洋化された例としてブリテンのオペラ『カーリュー・リヴァー』を，また近代の隅田川を描いた例として永井荷風の『すみだ川』を取り上げ，東洋と西洋，中世と近代を結ぶ報告を行った。中島教授は，ヴェルヌの作品に描かれた都市を分類考察し，科学技術の時代を背景にした都市観の特質を論じた。ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院日本・韓国文化研究科のドッド助教授は，梶井基次郎の「檸檬」において，自己と他者の流動的な境界を，都市空間表象との関わりあいにおいてどう明確化するかという問題を論じ，この作品をモダニストのフィクションの中に位置づけた。

引き続いて全体討論を行い，多岐にわたる各報告に見られる共通の問題意識を手がかりに，論点を絡み合わせてより深めることが試みられた。会場には100名を超える出席者があり，各報告に対する質問も活発で，盛況裡に初日を終えた。

夕刻からは学術情報総合センター1階の「ウィステリア」でレセプションが開催され，金児暁嗣副学長，中村圭爾文学研究科長，阪口弘之拠点リーダーをはじめとする50名を超える出席者が，シンポジウム報告者を交えて2時間余にわたって歓談した。

第2日には5名のCOE研究員が報告を行い，それぞれにアロカイ，ドッド両助教授がコメントを加えるという形式で進行した。劉氏は，説経の元禄期における二つの新作，『弘知上人』『崙山上人之由来』を取り上げ，説教の都市芸能としての消長をたどった。北原氏は，ゲーテの『若きウェルテルの悩み』での都市と郊外の境界となる市門の機能に着目し，この作品において都市が現実世界を意味していることを論じた。出口氏は都市を舞台としたT. S. エリオットの初期の詩を扱い，都市がエリオットの詩作の原動力となっていたことを指摘し，都市における欲望がそれにどう関連する

かを論じるとともに，詩に見られる老人のイメージの意味を考察した。鈴木氏は，抗日運動と左翼運動が交錯する1930年代の上海を舞台とした張天翼の『洋涇浜奇侠』を論じ，左翼作家であった張天翼がこの諷刺的作品で達成した現実の上海への肉薄をあとづけた。竹下氏は，ギブスンの近未来小説 *Neuromancer* を扱い，肉体の存在する現実の世界と，仮想空間である cyberspace の対比を論じ，現実の都市＝ディストピア，仮想都市＝ユートピアという図式の有効性と非有効性を検証し以上の報告と，それに対するコメントの後，会場からの質問を受ける時間が設けられた。

会場は第1日に比べて席数が少ない文化交流室であったが，50名近い出席者があり，質問も活発であった。とりわけ，アロカイ，ドッド両助教授のコメントは，懇切であると同時に新鮮な視点からの指摘があり，若い研究員にとってきわめて有意義であったと思う。

もとより「都市とフィクション」はたいへん広がりのあるテーマであり，今回のシンポジウムだけですべてを尽くすことはとうてい不可能である。今回はこのテーマの多様性の一端を提示したが，これを橋頭堡として，次年度以降，さらに掘り下げた展開を図っていきたい。

上海・サブセンターについて

栄原　永遠男

本稿の記載対象範囲

3月末時点までの状況は，本誌第2号に大岩本幸次講師によって報告されているので，ここでは平成15年4月1日から平成16年1月21日までの状況を報告する。

交流の枠組み

3月末の第2回研究会ならびに人文学院・教育科学学院との報告会・座談会（本誌2号ニュース参照）により，華東師範大学との学術交流の大枠がほぼ形成された。これには，事業推進担当者の森田洋司教授の尽力によるところが大きかったことを特記しておきたい。その大枠とは，以下のごとくである。

①両大学の学術交流は，大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター（上海・サブセンター担当，所長栄原永遠男，副所長山口久和・水内俊雄）と華東師範大学現代城市社会研究中心（所長陳映芳）との間で進められるものである。

②具体的には，華東師範大学の法政学院・人文学院・教育科学学院でそれぞれ編成される研究チームと，それに対応する専門分野の日本側研究者とが共同して研究を進める（以下，法政ルート，人文ルート，教育ルートと呼ぶ）。

③法政ルートは水内俊雄教授，人文ルートは山口久和教授，教育ルートは豊田ひさき教授（いずれも事業推進担当者）を責任者とする。この3教授を中心に，日本側研究チームを編成する。教育ルートの共同研究は，4月段階で基本計画の合意に到達した。

SARS問題の影響

以上によって，学術交流は軌道に乗りかけたが，その矢先にSARSの流行による渡航制限が出された。このため，華東師範大学との連絡は，メールや電話・ファックスでおこなわれたが，それは低調なものとならざるを得なかった。

とりわけ問題となったのが教育ルートである。責任者の豊田教授の転出問題が浮上する中，豊田教授から平成15年度の事業計画停止の要望が華東師範大学側にメールで送られた。この件は，その後6月4日の第13回センター会議で了承された。これにともない，教育ルート関係の予算も返上されることとなった。

7月にSARSによる渡航制限は解除されたが，その影響はその後も残り，夏期休暇に入ったこととも重なって，事態は進展しないまま時間が経過した。

ところが，9月になって，華東師範大学の杜成寛教育科学学院院長から7月に来ていたメールにより，豊田教授からの停止の要望は，SARS流行期間中の中止，終息後の再開として理解されていたことが明らかとなった。さらに，9月17日の第15回センター会議で，教育ルートの停止について慎重意見があいついで出された。なお，法政ルート，人文ルートについては，再開の方向で協議を始めていることが説明された。

教育ルートその他

そこで栄原は，現代城市社会研究中心の陳映芳所長と連絡を取って善後策を協議した。その結果は，次の3点にまとめることができる。

①華東師範大学側は，今年度の共同研究がまったく行われていないことを，とても困った事態であると認識している。

②ただし，教育ルートの共同研究を中止することは華東師範大学側も了解している。

③華東師範大学のいう「共同研究」とは，研究

費の獲得の事実によってはじめて開始されるものである。

これらの諸点は，10月1日の第16回常任委員会で栄原が報告し，これにもとづいて検討した結果，次の方針を常任委員会として決めた。

④教育ルートの共同研究は，事業推進担当者の豊田教授の転出を考えれば，停止せざるを得ない。ただし，華東師範大学側が共同研究の推進を強く要望した場合は，豊田教授在任中（平成16年7月末まで）に限っておこなうことも検討する。

⑤教育ルートの共同研究の停止により，他ルートに悪影響が出ないように，しかるべき立場のものが訪中して事情を説明し，華東師範大学側の了解を得る必要がある。

⑥そのため，金児曉嗣副学長，栄原，豊田教授の3人と，法政ルートで訪中する水内教授，中生勝美助教授とが合同して華東師範大学側と会見する。

⑦その際，法政・人文2ルートの共同研究推進に必要な予算を振り込む用意があることを伝える。

ところがその後，訪中直前に華東師範大学陳映芳所長から，教育ルートの停止に対して強い難色が示され，また，複数の日本側関係者からも④について危惧の意見が栄原に寄せられた。常任委員会・センター会議等を開く時間的余裕がない中，栄原を中心に検討を重ね，④については，華東師範大学との共同研究全体に大きな影響を与えることが十分に予想されるので，何らかの形で共同研究を継続すべきであるとの認識に達した。このことは，訪中メンバー，常任委員等も了解した。

華東師範大学側との交渉

10月16日以降の華東師範大学側との交渉は，次の会見によっておこなわれた。

10月16日(木)

①午後3時20分～4時30分

陳所長との予備相談（於サブセンター）

②午後5時10分～6時

羅国振副学長との会談（於逸夫楼会議室）

大阪市立大学と華東師範大学との学術交流について，包括的に意見交換し，その推進について合意した。

出席者：日本側6人　訪中メンバー，山崎覚士COE研究員

中国側4人　羅副学長，許広平社会科学研究処長，高瑞泉人文学院長，陳所長

10月17日(金)

③午前10時～11時30分

教育科学学院と会談（於教育科学学院会議室）

教育ルートの共同研究推進について，豊田教授から大阪市立大学側の考え方について説明し，意見交換の後，合意した。

出席者：日本側　豊田，栄原，水内，中生

中国側　杜成寛院長，馬和民，黄何陽，陳所長

④午後2時20分～5時30分

高瑞泉人文学院長と会談（於サブセンター）

人文ルートの共同研究について，大阪市立大学側の考え方を説明したが，意見にへだたりがあり，再度会談することとなった。

出席者：日本側　栄原，水内，中生

中国側　高瑞泉，陳所長

10月18日(土)

⑤午前11時40分～12時30分

陳所長と相談（於サブセンター）

法政ルートの共同研究について意見交換した。

出席者　日本側　栄原，水内，中生

中国側　陳所長

⑥午後7時30分～9時

高瑞泉氏と2回目の会談（於逸夫楼ロビー）

人文ルートの共同研究の進め方について，細部にわたって相談。基本的合意に達した。

出席者　日本側　栄原，水内，中生

中国側　高瑞泉

10月19日（日）

⑦午後2時～5時30分

法政学院との共同研究会

栄原の挨拶，水内・中生の研究発表。タイトルは次のとおりである。水内俊雄「日本の都市再開発，スラムクリアランスの歴史と現状」，中生勝美「満鉄調査部上海不動産慣行調査資料紹介」。その後，今後の共同研究の進め方について相談した。

出席者　日本側　栄原，水内，中生

中国側　陳所長，王子奇，倪文尖，達良俊，林拓

以上の会談・相談等を通じて，以下の諸点で合意に達した。

①教育ルートは共同研究を継続する。詳細は，12月に日本側の担当者が訪問して，再度相談

する機会をもつ。
②教育科学学院側の共同研究メンバーを1人減らして4人とする。
③中国側研究者に研究費と，共同研究の成果物に執筆した場合は原稿料を支払う。支払いは，平成15，16年度に分けておこなう。平成15年度分については，サブセンター維持費とともに帰国後速やかに振り込む。
④平成15年度は，人文学院との共同研究の成果をISBN番号を取得して年度中に刊行する。これを，人文学院側が211プログラムの成果として扱うことを認める。
⑤人文学院との共同国際シンポジウムは12月3，4日に華東師範大学で開催する。

以上の内容は，10月22日の第16回センター会議で報告した。これに対して，中国側共同研究者の業績，日本側の研究体制，研究成果をあげる可能性，成果刊行物の編集権等について質問・意見があったが，基本的には了承された。

共同研究の再開

その後，日本側の共同研究体制の再構築がおこなわれた。
①教育ルート
豊田教授の転出という事情を華東師範大学側に伝えた。これにより，このルートに関する事業推進担当者を新たに人選することとなった。また，具体的な共同研究は，添田晴雄助教授・木原俊行助教授を中心に推進することとなった。これにともない，12月上旬に両助教授が華東師範大学を訪問して，教育科学学院と交渉した。
その結果，「カリキュラム改革に求められる教師の専門性――その獲得を提供しうる教員研修プログラムのプロトタイプ開発を目指して――」を共同研究テーマとすることで合意した。日本側研究チームは4名とする。両助教授以外の2名は，学外を含めて人選するが，固定メンバーではない。
平成16年6月と10月に日中双方で共同研究会を開催し，両国のカリキュラム改革の動向を共通理解するとともに，その具体化に関して都市の学校が抱える課題を明らかにする。また，同時期に，いくつかの学校を対象とする事例研究を展開する。そして，それらの成果を，年度末には報告書や著書にまとめる。さらに平成17年度には，アンケート調査や聞き取り調査を実施する。
②人文ルート
12月3日に華東師範大学で国際シンポジウムを行なった。これには，山口教授・井上徹教授・張新民助教授・廣重友子氏（COE共同研究者）の4人が参加し，研究報告した。中国側発表者は，高瑞泉・許紀霖・羅崗・倪文尖の4人。これらの報告原稿は，日中両国側で査読し，その意見に従ってそれぞれ修正を加えた。日本側4論文は，1月に完成して華東師範大学側に送付した。これにより，年度内刊行がほぼ可能となった。
③法政ルート
水内教授・中生助教授を中心に進めることとなった。11月下旬から12月初旬に，水内・中生・神田（COE研究員）の3名が訪中し，共同研究の進め方，都市再開発調査の行い方等について，華東師範大学側と話し合った。その結果，都市開発の現地調査は，都市再開発が，社会・政治問題化している現状において，海外の研究者との共同研究というスタイルで進めることは，現在のところ得策ではない。それにかわって，当面は上海の都市形成過程の歴史的調査に力点を置くこととし，資料収集，現地調査を開始した。
特に旧租界およびその周辺部は，租界時代の両面の住宅ストックを有しており，そうした住宅ストックが，現在どのように再利用され，ジェントリフィケーションが見られるのか，あるいはどのような再定住の様式が見られるのか，Exploring SHANGHAI before 1949, and its Heritage in the Contemporary Urbanizationといったメインテーマを主軸に調査を進めることにした。地図や現地の写真，当時の写真を駆使しながら，Cityscape Archiveという形でホームページに調査の蓄積を公開し始めた。

COE研究員の派遣

山崎覚士（COE研究員，東洋史学専修）を9月2日から平成16年2月28日まで，上海サブセンターに派遣した。

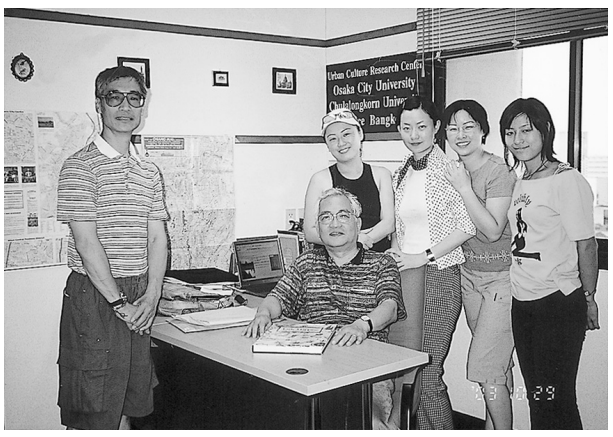
バンコク・サブセンターについて

山野　正彦

前号に記載の平成15年7月6日以降の活動について報告する。第1回フォーラムの報告書作成作業が現地事務員の手によって地道に進められた。チュラロンコン大学の英文校閲の基準は厳しく，英文の手直しが必要となる。7月15日から中川教授と橋爪助教授が出張し，報告書編集と印刷の手配を行い，合わせて平成16年1月の第2回フォーラム開催のために，チャナロン芸術学部長，ブッサコーン副学部長と打ち合わせを行った。さらにこれからの調査研究の予察としてバンコク市街地を

現地踏査した。次いで山野は10月26日から11月9日まで駐在し，事務員とともにサブセンター運営と学術交流に関する諸事務を遂行する。英和大辞典，和英大辞典，デジタルカメラなどの備品が備えられた。

10月29日にはタイを研修旅行中のアジア都市文化学専修の院生ら5名がサブセンターを見学に訪れた。山野の案内でチュラロンコン大学構内，近隣の市場や中華レストラン街などを見学した。今後もこの種の院生・学生の巡検旅行でサブセンターを活用することは有意義であるので，推進したいものである。山野はまた1月にCOE研究員として大阪市立大学に招聘される予定のパトラワディ氏と面談し手続きを進めた。サブセンターには毎日のように関係教員が訪れ，多忙である。12月に奈良・大阪に来る予定の芸術学部カンタマラ助教授はバンコクとその周辺の寺院の壁画・絵図を調査している山野に協力を惜しまれず，共同研究の相談に立ちいたる。こうしてとある晴天の1日，同氏と絵画が専門のレク助教授の案内で，ペチャブリ，ラチャブリの古い寺院を訪問することができ，多くの収穫を得ることができた。



11月26日からは中川教授が出張し，第2回フォーラムを1月10日にバンコクで開催すること，テーマはそれまでに打ち合わせたとおり，アート・フォー・オール（すべての人のための芸術）にすることを最終決定し，さらにやや遅れている15年4月に開催したフォーラムの英文報告書出版の詰めを行った。中川教授と橋爪助教授はフォーラム開催のため，1月8日までにそれぞれバンコク入りした。今回のフォーラムには障害者の教育等の専門家が必要なため，2人のほかに報告者として山口悦子氏（大阪市立大学附属病院小児科医師），播磨靖夫氏（ジャーナリスト，障害者の芸術文化ネットワーク作りのボランティア活動推進者），保志場国夫氏（プランナー・ＵＦＪ総合研究所）など実践活動に携わっておられるかたがたを外部協力研究者として派遣した。またCOE研究員の原口剛氏（地理学）も参加し書記を勤めた。フォーラムの進行は通訳者に人を得たおかげでスムーズに進んだ。発表者とタイトルは次のとおりである。

Ｐ．チャナロン学部長「アート・フォー・オール」
Ｔ．スワッタナ助教授「タイの都市コンテクストの中での障害者と老齢者」
Ｐ．ウドン博士「芸術療法――医学における芸術の役割」
播磨靖夫「エイブルアート運動」
保志場国夫「バリアー・フリーデザインとコミュニケーション」
山口悦子「病院における芸術：大阪市立大学附属病院における2つの事例」

9時30分から16時30分にわたる熱のこもった話題の提示と討論の応酬により，アートを用いた障害者や入院患者等に対する力づけに関して，タイと日本の実践者による報告と意見交換の場を設けたいというオーガナイザーの狙いは達せられたといえるであろう。このあと船上での会食が行われ，フォーラムは成功裡に終った。フォーラムの報告書の出版は来年度前半に予定されている。なお昨年の第1回フォーラムの英文報告書は1月下旬に完成した。

バンコク・サブセンターの運営はほぼ順調に行われているが，まったく問題がないわけではない。問題の一つは事務員への謝金，フォーラムの費用，招聘研究者の航空券費用の支払い等，日本からタイへの送金方法についてである。両替手数料も加わり銀行送金の手数料が高いので，国内のように簡単に送金することができないことが悩みの種である。またサブセンターにもっと頻繁にこちらの研究者が駐在して，さらに設置の効果を高める必要もある。特に出版物の編集のためにはこのことが欠かせない。次年度に向かって改善に努力すべき課題である。

ジョクジャカルタ・サブセンターについて

中川　眞

ジョクジャカルタ・サブセンターへは，石田佐恵子助教授，中川眞教授が赴き，運営に携わった。

石田佐恵子は，平成15年8月18日から9月7日までの3週間，サブセンターに滞在して，主にインドネシア国立芸術大学テレビ学科との共同研究プロジェクトの企画立案に従事した。具体的には，

インドネシア国立芸術大学の学生を中心にジョクジャカルタのイメージを題材としたビデオ・ドキュメンタリーを制作してもらい，ジョクジャカルタ及び大阪，その他の地域での共同作品展を開くという企画である。バンデム学長およびスジョノ教授に面談し，平成16年の中間成果発表までのタイムスケジュールについて打ち合わせを行った。また，現地協力者を得て，自身でもジョクジャカルタのテレビ視聴経験を題材に，ドキュメンタリー制作のための素材収集を行った。滞在期間中に開催された独立記念日関連行事の取材，ガジャマダ大学訪問，多数の一般家庭訪問，インタビューの収録を行った。また，インドネシア国立芸術大学の卒業式にも参列し，知見を広めた。

中川眞は，平成15年11月29日から平成16年1月7日まで約6週間弱，サブセンターを拠点として活動を行った。それは以下の点である。(1) 第1回アカデミック・フォーラムの英文報告書の編集作業。(2) 環境モノグラフ調査。ジョクジャカルタ市内のサウンドスケープ調査。(3) 国際的研究拠点の交流。(4) 第2回アカデミック・フォーラムの準備。

(1) については，平成16年1月末の発行となった。簡単な書誌情報を記すと，Shin Nakagawa, R. M. Soedarsono & I Made Bandem (eds), *Urban Culture Research,* Vol.1, UCRC Yogyakarta Subcenter, Yogyakarta, 128p, ISBN: 0-0452890-0-1 である。

(2) については，中川の他，インドネシア国立芸術大学のブディ・ラハルジョ講師，同大学生3名，ガジャマダ大学文化科学部学生1名の計6名によって共同調査を行った。DATテープ40本，アンケート回収350通など。データ解析は，平成16年度に引き続き行われる予定である。

(3) については，バンコク・サブセンター設置場所で，学術交流協定校でもあるチュラロンコン大学芸術学部副学部長のブッサコーン・サムロントン助教授がジョクジャカルタ・サブセンターを訪れ，インドネシア国立芸術大学のバンデム学長他と会合をもって，大阪市立大学，チュラロンコン大学，インドネシア国立芸術大学の今後の学術・芸術交流の実施の具体的方法について話し合った。なお，平成16年2月にはインドネシア国立芸術大学のヘルミエン副学長がバンコク・サブセンターを訪問することになっており，交流活動は一気に加速する予定である。

(4) については，1月29日に ‘Coexistence in the Multicultural City’ というテーマでガジャマダ大学マルチメディア室にて行われた。

以上の大阪市立大学側の研究者の活動期間の他に，インドネシア芸術大学，ガジャマダ大学文化科学部の教員，学生による共同研究（環境モノグラフ作成）が継続的に行われている。

ハンブルク・サブセンターについて

(1)　　金光　桂子

報告者は，平成15年6月1日から7月31日まで，大阪市立大学在外研究員として，ドイツに滞在した。その期間中，ハンブルクのサブセンターを利用させていただくことができ，サブセンター関係の業務にも携わった。ここでは，その間のサブセンターをめぐる状況について，報告を行う。

サブセンター関係の業務としては，主に日本との連絡役を務めた。折しも，ハンブルク・サブセンターの開設を記念して，ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室と大阪市立大学大学院文学研究科との共同による研究会が予定されていたため，その日程や内容について，ハンブルク大学のローラント・シュナイダー教授や宮崎登講師と，何度か打合せをさせていただいた。6月25日に実施された共同研究会や，その前日に行われた授業交流の模様は，本誌第2号の田畑雅英助教授による報告に詳しい。

また，日本では，7月に大阪市立大学文学部創立50周年記念シンポジウムが行われており，シュナイダー教授がパネリストとして訪日された。なお，シンポジウム後の祝賀会には，サブセンターからも祝電を寄せさせていただいた。

シュナイダー教授は，同じく50周年記念事業である9月のインターナショナル・スクールにも，出講していただくことになっていた。9月30日・10月1日に行われるシンポジウム「都市とフィクション」に参加していただくユーディット・アロカイ助教授，COE研究員として9月から大阪に滞在するエヴァ・カミンスキー氏も，このインターナショナル・スクールにご協力くださることになっていたが，お三方の渡航に先だっての事務的な手続きも，報告者の滞在期間中におおよそ整えることができた。

業務の報告からは外れるが，一度，関東の大学からハンブルク大学に留学中という学生2名の訪問を受けたことがあった。日本からドイツへの留学プログラムについての研究発表を行うため，学内で資料を探していたところ，たまたまサブセンターの表示を見付けて，立ち寄ったということであった。突然のことで必ずしも十分な説明はでき

なかったが, 本誌創刊号を見せながら質問に答え, 都市文化研究センターのHPを紹介しておいた。

以下はやや私事にわたることであるが，参考までに記しておきたい。ハンブルクでの報告者の宿舎は, 大学のゲストハウスが満室状態だったため, 宮崎講師や日本学研究室の学生の方々がご尽力くださって，民間のアパートを1室借りることができた。大学からは地下鉄を利用して40分ほどの閑静な住宅街で，快適に過ごさせていただいた。なお，宿舎の入退居の手続きから，大学の諸施設・設備の利用方法まで，万事COE研究員のカミンスキー氏のお世話に与った。記して心より感謝申し上げたい。

報告者の在外研究のテーマは，奈良絵本・絵巻を中心とした在欧日本古典籍の調査であり，ハンブルクを拠点として，ベルリン，ミュンヘンなど，ドイツ国内各地へ資料調査に出かけた。フランクフルト市立工芸美術館での調査に際しては，シュナイダー教授のご厚意で便宜をはかっていただいた。さらにサブセンター備品のデジタルカメラを活用させていただき，大量の写真データを持ち帰ることができた。

(2)　　北原　博

はじめに

報告者は平成15年7月28日から8月27日までの1ヶ月間，ハンブルクのサブセンターに派遣していただいた。7月末まで金光講師がサブセンターに滞在したので，引き続いてサブセンターの維持業務に携わった。また，報告者自身のCOE研究活動として次の2点を滞在の目的に設定した。本年度研究テーマ「ドイツ近代におけるフリーメイソン運動と都市」のための資料収集を行うことと，平成15年9月30日・10月1日開催のシンポジウム「都市とフィクション」での報告のための資料収集を行うことである。

以下では，サブセンターの維持業務と報告者自身のCOE研究活動とに分けてハンブルク・サブセンターでの滞在を報告すると共に，1ヶ月の滞在を通して感じた点を最後に報告者の私見としてまとめてみた。

1　サブセンターの維持活動について

ハンブルク・サブセンターは，ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室の1室を使わせて頂いているので，サブセンターのための管理業務は大幅に軽減されている。シュナイダー教授や宮崎講師をはじめハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室のスタッフの皆さんに感謝したい。また，高梨助教授のご尽力により，センターの備品については充実している。消耗品も十分準備されており，ファックス・プリンタ複合機のインクを補充したくらいである。

サブセンターは海外研究者とのネットワークの結節点であるので，ハンブルク大学の先生方との交流は非常に大切であると思われる。夏期休業中でいらっしゃらない先生方も多かったが，日本学研究室全ての先生と研究テーマについて話し合う機会を一度は持つことを目標とした。残念ながら，全員というわけにはいかなかったが。こうした交流は，ヨーロッパの都市文化を研究する者にとり大変貴重な機会である。報告者は普段ドイツの文化を日本からの視点で特徴づけようとしているわけであるが，報告者の視点がドイツの視点ではどのように受け取られるのか，逆にドイツの日本研究者がどのような視点で日本文化を研究しようとしているのかを知るのによい機会となった。とりわけヴォルム博士には報告者の研究についてじっくりと話を聞いていただき，研究上の示唆を頂いた。

また，報告者の滞在期間中，アジア・アフリカ研究所では日本および台湾の学生を対象にした夏期ドイツ語コースが開催されており，このコースのレセプションにも招待していただき，ホルガー・フィッシャー副学長とお話する機会を持つことができた。

なお，サブセンターの維持業務とは直接関係ないことであるが，ハンブルク・サブセンターは宿泊施設を併設していないので，サブセンター滞在中は別に宿泊施設を確保する必要がある。報告者の場合，COE研究員カミンスキー氏のご助力で，ハンブルク大学ゲストハウスに滞在することができた。ハンブルク大学のゲストハウスを利用できるメリットは大きい。サブセンターに近く交通も至便で住環境も快適であるばかりか宿泊費もホテル滞在に比べて安価であり，滞在費用を節約できた。それに加えて研究面でのメリットも少なくはない。ゲストハウスには滞在者用に図書館利用カードが用意されており，ハンブルクの州立・大学図書館の膨大な蔵書を活用することができる。

ゲストハウスには常に空室があるというわけではないので，できるだけ早く手続きを進める必要がある。また，次の滞在者および滞在期間が確定していれば，派遣された研究員による次の滞在者のためのゲストハウスの予約も可能である。

2　研究活動について

続いて，報告者個人の研究について触れておきたい。報告者の研究は18世紀ドイツが中心なので，現在までの研究状況を把握するだけでなく，18世紀の文献・資料の収集が必要となる。まず活用したのがハンブルク大学図書館である。同図書館所蔵資料は，サブセンターのコンピュータを利用し，オンライン検索・予約が可能である。なお，予約に際しては，ゲストハウスの図書カードを利用した。また，同図書館の2階(日本でいう3階)の閲覧室奥に，ハンブルク・コレクションがあり，ハンブルクに関わる資料が充実している。都市ハンブルクのフリーメイソンの歴史に関する文献を収集することができた。また，独文学ゼミナールの図書室も活用させていただいた。この図書室は開架図書館だが，ゲストハウスのカードにより複写のための館外持ち出しが可能である。

報告者の研究に密接に関係する資料は，ハノーファーのニーダーザクセン州立図書館に「フリーメイソンコレクション」として集められている。コピー禁止書籍についても，デジタルカメラでの撮影は可能だったので，サブセンターのカメラにより，18世紀の文献が入手できた。また，儀礼を描いた銅版画の閲覧もでき，儀礼についての理解を深めることが出来た。なお，今回は日程の余裕がなかったことに加え，列車の遅れもあり，ハノーファーでの文献収集は十分ではなかった。改めて本格的な資料収集を行いたいと考えている。

さらに国際シンポジウムでの発表準備として，ヴェツラルの歴史文書館で地図を入手できた。かつて帝国最高法院が置かれていたこの小都市はゲーテの『若きウェルテルの悩み』のモデルとなった都市である。報告者の発表は，ヴェツラルで入手した古い地図やフィールドワークを通して，かつての都市の構造を再構成し，作品世界における都市構造の意味を明らかにすることを意図したものであり，今回のドイツ滞在を通して入手した資料は報告の論証に大いに役立てることができた。

もちろん，大学に設置されたサブセンターの利点を活かし，ゲーテ研究者との交流も行っている。ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室の山守講師をご紹介頂き，シュテファン・ブレッシン教授を訪ね，研究テーマの概要を説明し，研究上の助言を頂くことができた。

3　サブセンターでの活動への提言など

次に1ヶ月間ハンブルクのサブセンターに滞在して感じたことをいくつか記しておきたい。備品については，より大容量なデジタルカメラのメモリーがあればと感じられた。研究についての報告でも言及したように，文献の保護のためにコピーがとれない場合であっても，デジタルカメラでの撮影は可能な場合がある。報告者の研究領域のように，文献の収集が研究上欠かせない研究では，限られた滞在時間を有効に利用するためにも，記録装置の充実は重要であるように思われる。

また，海外拠点を維持していくためには，ハンブルク大学にとっても，より魅力あるものとする必要があるように思われた。報告者が滞在していた時点では，日本学研究室の図書担当の先生も本誌『都市文化研究』をご覧になったことがないとおっしゃっていたので，継続的にアジア・アフリカ研究所図書室に寄贈されるようにする必要がある。この点については，報告者の滞在中にメーリングリストを通じて提言しているので，改善いただけていると思う。

サブセンターが研究成果を発信していく場であるだけではなく，大阪や大阪市立大学を身近に感じられる場にできれば一層良いのではないか。そのためには，大阪文化の素材を常備してはどうだろうか。また，日本学研究室には日本文化に対する関心を抱いている学生たちが集まっているので，COE研究員がサブセンターに滞在する場合には，自分の専門と日本文化を結びつけるような形で読書会・研究会を開催することで，学生との交流がはかれればよいのではないか。サブセンターでの活動についての宣伝も有用であるように思われる。サブセンターを幅広い都市文化研究のための交流拠点として，一層開かれたものにできればと思われた。

おわりに

今回，ハンブルク・サブセンターに派遣していただけたために，国際シンポジウム「都市とフィクション」での発表のための主要な資料を収集できたばかりか，都市のネットワークとしてのフリーメイソン研究のためにも貴重な資料を収集することができた。前者についてはシンポジウムの報告書を参照していただきたい。後者についても，できるだけ早く研究成果をまとめて公表したいと考えている。

(3)　　向井　有理子

平成15年10月21日から12月5日までCOE研究員としてハンブルク・サブセンターに滞在した。この滞在の一番の目的はハンブルク大学の社会心理学者，ヴィッテ教授，チュールケ講師の研究協力の第一歩としてハンブルクでの調査の準備を行

うことであった。

1　研究テーマと主な滞在目的

報告者のCOE研究員としての研究テーマは「自尊心と異文化受容」であり，自尊心と異文化受容の関係に都市化が与える影響を明らかにしていくことが目的である。これまでの研究では日本における実験や調査から，自文化への脅威などについて恐怖管理理論という理論を用い，研究を行ってきた。自尊心と異文化受容の関係を解明するにあたっても，恐怖管理理論の観点からの考察を行っている。ドイツはこの理論について盛んに実験や調査が行われている国のひとつである。また，近年，自尊心に関係がある若年者の失業問題や，移民の増加にかかわる問題を抱えている国のひとつでもあり，恐怖管理理論の観点から自尊心と異文化受容の関係を調べるのに適した国であると考えた。

ハンブルクでの調査は金児曉嗣副学長，COE研究員渡部美穂子氏との協力の下，平成14年度2月，3月に行われた関西圏の住民の生活様式と価値観についての調査研究をふまえる形で計画した。これはハンブルク市内およびその近郊の住民を対象に生活様式と価値観についてアンケート形式で行うものである。アンケートではできる限り幅広い項目について測定することで，報告者の研究においてもより多方面からのアプローチが可能となる。

この調査を適切に実施することができれば，ハンブルクの都市民の価値観と生活様式の特徴が捉えられるだけでなく，日本の調査研究の結果との比較を行うことで日本とドイツにおける違いを明らかにし，一般理論を構築することが可能である。日本での準備として，まず，関西圏でおこなわれた調査の中から，宗教観，宗教行動，自尊心，死観，自国と外国への態度などの項目を用意して渡独した。

2　共同研究のためのミーティング

ちょうどハンブルク大学では新しいセメスターが開始されたばかりで，いずれの先生も多忙を極めている中，今回の共同研究プロジェクトに参加，ご協力いただき，非常に感謝している。社会心理学教室のヴィッテ教授，チュールケ講師とのミーティング（主にチュールケ講師とのミーティング）では，ハンブルクの調査のための質問項目の整備を中心に議論をする機会を得た。このハンブルクでの調査の成功のための第一の課題は，適切なドイツ語の調査項目の作成である。単なる翻訳では日本語の項目と同じ意図で同じものを測定できているのかどうかに大きな疑問がある。この問題を解決することがハンブルク滞在において重要な作業となった。日本語で用意した項目を元に，ハンブルクにおける都市民の特徴をとらえるための項目案として英語訳，ドイツ語訳の質問項目を用意し，ミーティングを重ね，ドイツでの調査に適したものにすることを目指した。

特に，重要な変数として調査の重要な部分を占めている，宗教にかかわる行動や意識を問う項目では日本語版の英語訳，ドイツ語訳をもとに先生方に指摘いただいた。この結果を検討し，また，我々の研究意図を伝えることを繰り返し，より適切な測度を作成することができたと思われる。さらに，ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室の学生の方々などの協力によって，普段の宗教や迷信にかかわる意識や行動をはじめ，調査項目に含まれる事柄をインタビュー等によって知ることができた。この経験は，ハンブルクでの調査に非常に有意義なものであり，多忙な中，ご協力をいただいた学生の方々には感謝している。

宗教についてはハンブルクの都市部住民の多くには，あまり熱心な信仰は見られないという印象が強かった。時期的にクリスマスが近かったこともあり，教会では信者の方々による集まりやバザーのようなものが開かれてはいたが，多くの人々にはクリスマスの宗教的な意図はあまり意識されていないようであった。学生らの話の中からも，クリスマスは宗教的な行事というよりも伝統的なお祭りという性格が強いことが感じられた。慰霊行動などに関しては，学生達はまったく熱心ではないようであったが，ハンブルク郊外の大規模な墓地ではかなりの墓に花やクリスマスリースなどが供えられ，年配の人を中心に訪れる人もいた。

異文化の受容という面では，ハンブルクでの印象は，大阪と比較してより外国人，異民族の受け入れに積極的である，もしくは活発であるというものであった。また，かつての西ドイツ・東ドイツ出身であることがこの問題では考慮すべきであるという指摘を幾人かの人から得た。これは本調査では十分に検討できるか疑問ではあるが，今後の研究において重要な要因としてとらえねばならないだろう。また，愛国心については，「ドイツ人であることを誇りに思う」などの項目について「はい」と答えることにいささか抵抗を感じる可能性があることが指摘された。これは過去の戦争からの影響として，同様の可能性がハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室の学生からも伺えた。

チュールケ講師とのミーティングでは，項目についての検討のほか，調査対象者，調査方法についての検討も行った。先生方のご協力を得ることで，ハンブルク市民および周囲の村落地域の住民への調査が可能となった。このハンブルクでの調査は現在データ収集中である。

また，ミーティングの中では日本での調査の計画についても話し合いを行った。日本での調査研究はチュールケ講師を中心とした自己概念について，都市化の影響などを明らかにし，さらに，ドイツでの調査結果と比較することで日本とドイツの違いを明らかにするものである。これについても現在データ収集中である。また，ヴィッテ教授，チュールケ講師とのミーティングでは，こうした今回の調査にかかわる話し合いにとどまらず，今後更なる研究協力をしていこうという意思を互いに確認しあうことができた。今後現在データ収集中である本調査を踏まえ，さらに研究を発展させること，より踏み込んだ研究協力，共同研究の可能性を探っていこうということを話し合った。

ハンブルク大学でのこれらのミーティングに際しては，日本学研究室のアロカイ助教授を介して同研究室の山守淳平講師が通訳として多大な協力をしてくださったことで，より細部にわたるまでミーティングにて話し合うことができた。山守講師にはこの場を借りて改めて感謝の意を示したい。

3　その他

サブセンター滞在中には，シュナイダー教授をはじめとしたハンブルク大学の日本学研究室の先生方のご好意から，COE研究員としての研究について先生方と数人の学生の方の前で，発表する機会を頂いた。発表では様々なご指摘，ご意見をいただき，さらに，異文化交流に関するドイツでの研究をご紹介いただいた。また，滞在期間中，日本学研究室のポール教授と東南アジア地域がご専門のグラーフ博士の講義に出席させていただいた。東アジア地域の各港湾都市についての講義では，各都市の成り立ちなどについて学生の発表がなされ，活発な議論が展開された。内容はもとより，進行方法や学生の参加もふくめ，興味深い講義であった。

サブセンター滞在中には，宮崎講師をはじめ，日本学研究室の先生方には様々な面でサポートをしていただき，心から感謝の意を表したい。

ロンドン・サブセンターについて

（1）　　渡部　美穂子

報告者は，平成15年7月22日の夜，ロンドンに到着した。その日はパディントン駅近くのホテルに一泊し，翌日7月23日から8月23日までロンドン・サブセンターに滞在した後，COE研究員の出口菜摘氏とサブセンター業務を交代し，ベイカーストリート近くのホテルで帰国までの1週間を過ごした。

まず，サブセンターの状況について報告する。先の滞在者の報告にもあるとおり，ロンドン・サブセンターは交通の便，治安面でたいへん恵まれた場所に位置しており，女性が一人で滞在する不安をほとんど感じることなく，快適に過ごすことができた。また，センター内の設備も十分に整っており，滞在中に購入すべきものは食料品と日用品のみで，これは長期滞在者にとってたいへんありがたいことであった。ただ，第2号で金光講師が報告しているような諸般の事情があるとはいえ，今後の滞在者のためには書棚と机は購入を検討する必要があろうかと思われる。また，インターネット環境についていえば，滞在者個人が契約するプロバイダーにダイヤルアップで接続しなければならず，電話料金は経費で処理されるが，別に接続料金が個人負担となる。これは，メールの送受信程度であればまったく問題はないと思われるが，サブセンターの業務にかかわって大きなファイルのダウンロードなどを頻繁におこなうような事態が生じるとすれば，個人がそれを負担することは問題となるであろう。たとえば，報告者の滞在中，ブラスターワームと呼ばれるウィルス被害が世界的に広がり，その対策としてウィンドウズのアップデートとウィルス駆除ソフトのインストールが必要となったが，ロンドン・サブセンターに設置されているノート型コンピューターは，購入以来一度もアップデートされておらず，ダイヤルアップでこれらの処理を行おうとしたところ，少なくとも5～6時間以上はかかってしまうようであったので，途中で断念してしまう，ということがあった。結局，ウィルス駆除ソフトだけをインストールしたのだが，今後も同様の事態が発生する可能性は高く，検討課題であろう。

対応策のひとつとして提案したいのは，ブロードバンド接続にして，ロンドン・サブセンターのメールアドレスを取得するというものだ。報告者の滞在中，といっても帰国直前の8月28日の夕刻にロンドンで大規模な停電があり，列車や地下鉄がストップして帰宅する人びとに大きな被害を与

えるということがあった。外出先から滞在しているホテルに帰るためバスを利用しようとバス停で待っていたのだが，やってくるバスはすべて満員でバス停を素通りしてしまう。結局，最寄りの始発ターミナルまで行って，ようやく乗車することができたのだったが，ホテルに戻りテレビで停電のニュースを見るまで，まったく状況が飲み込めなかった。ロンドン・サブセンターにはラジオが設置されているが，報告者のような英語に堪能でないものは，ラジオを情報源として活用するのは困難である。イギリスでは「テレビ視聴料金」を支払う義務が生じるため，テレビを購入することは難しいとしても，ブロードバンド接続環境があれば，インターネットを通じて情報をリアルタイムで収集することが可能となる。この意味でも，インターネット環境に関しては，検討すべき問題であるといえるのではないだろうか。

次に，ロンドンでの研究活動について報告する。昨年度のCOE事業の一環として「関西圏の都市住民と村落住民の生活様式と価値観」に関する大規模な調査研究が実施された。その内容，調査結果の一部については，すでに2003年9月に東洋大学で開催された第44回日本社会心理学会で報告されるとともに，本号の論文「都市は人の心と社会を疲弊させるか？」にまとめている。この研究をふまえ，ロンドンとハンブルクでも同様の調査研究を実施するという目的のため，まず，ロンドン大学SOASのガーストル教授を訪ね，研究の概略を伝えたところ，SOASのJapan Research Centre長であるブリーン教授をご紹介いただいた。ブリーン教授のご専門は19世紀の日本の政治史であるが，日本人の宗教観や死生観に興味をお持ちであるとともに，近日中に公刊予定の「Mortality」という雑誌での特集「Death of Japan」の責任編集者でもあり，われわれの研究内容に関心を示してくださり，ロンドンにおける調査への協力を快く引き受けてくださった。さらに，ご多忙中にもかかわらず8月13日，14日，20日，26日の4度にわたり，詳細について説明し，調査内容を検討いただく機会を得た。この調査については現在，着々と準備が進んでおり，近日中にデータを収集できる予定である。ロンドンとハンブルクでの調査によって昨年度の日本データとの比較が可能となり，それによって都市と村落との対比のみならず，文化間比較というさらに包括的な分析が施され，このテーマにおける普遍的結論が導かれることを期待している。ブリーン教授とは，この調査研究のみならず，今後もさまざまな面においてご指導，ご協力を賜る機会があるであろう。COE事業のなかで，このような出会いを得たことを心より感謝している。

また，この調査研究のための資料収集として，イギリス人の墓参行動についてフィールドワークをおこなったことも報告しておきたい。報告者の研究テーマは死生観であるが，それは自分自身の死に対する態度と自分にとって大切な人の死に対する態度を含んでいる。重要な他者の死に対する態度を研究する上で，墓参行動は非常に重要な研究対象である。ブリーン教授やSOASの大学院生であるバーバラ・クロス氏に尋ねたところ，イギリスでは日本のような墓参行動はほとんどみられない，ということであったので，ロンドンの墓地を観察してみることにした。まず，ロンドン・サブセンターのすぐそばにあるセイントジョーンズ教会裏にある墓地は，どの墓石もかなり古く，雑草に覆われており，誰かが手入れをしている様子はまったくなかった。この教会の裏手は公園のようになっていて，その一角にひっそりと墓石が散在している，という状態である。さまざまな人がその公園で憩い，昼食をとり，歓談していたが，そこにはわれわれ日本人が抱く「墓地や葬られている人への思い」は感じられなかった。

次に訪れたロンドン南西部に広大な敷地面積を占めるBrompton Cemeteryもまた，古い墓石が多く，その敷地内にいる人びとは，明らかに墓参に来たのではなく，昼寝をしていたり，恋人同士が語らっていたりと，公園でくつろいでいるという様子だった。また，月に一度はツアーが開催されるほど，著名人の墓が点在しており，観光地という側面もあるようだった。

ただ，最後に行ったロンドン北西部のKensal Green Cemeteryは少し様子が異なり，比較的新しい墓石が多く見られた。上記の墓地とは異なり，手入れが行き届いていること，墓石に写真が埋め込まれていること，家族（たとえば夫婦）が隣同士に葬られていることが特徴としてあげられる。日本のように生花が手向けられていることはないのだが，墓石周辺には花が植えられていたり，芝生が敷き詰められているし，さまざまなオブジェ（天使の置物やリース）が置かれている。また，この墓地では，墓参りをしている夫妻に話を聞くことができた。彼らは60代前後と思われる初老の夫妻で，じょうろやバケツを手に歩いていたので声をかけたところ，25歳の娘を亡くし，毎週日曜にはかかさず墓の手入れとお祈りのために来ている，という。きれいな芝生と植物に囲まれ見事に手入れされた墓をみると，その夫婦の娘に対する思いをひしひしと感じ，墓参行動がまれであるイギリスでも，大切な娘を亡くした両親が送る日々の生活は，宗教や文化が異なる日本人のそれと

まったく同じなのだと感じた。自分自身の死に対する態度は，宗教や文化の影響を強く受け，観念的あるいは哲学的な信条を基盤とするであろうが，身近な，しかも大切な人を失ったとき，人々はそれをどう受け止め，それに対処するのかについていえば，この墓参行動の観察から，宗教や文化を超えた普遍的な対処法が存在する可能性が示唆されるのではないだろうか。これについては，今後の研究で明らかにしていきたい。

最後に，大学院の博士課程に身をおきながら，COE事業の一環として全面的に支援を受け，海外に長期にわたり滞在して比較文化研究に携わることができることに心から感謝の意を表したい。COE研究員として採用され，しかもロンドン・サブセンターへ派遣されたことは，今後の研究活動の上で，大変貴重な経験となった。これからも大学院生がCOE研究員としてロンドン・サブセンターへ派遣され，それぞれの研究がより実り多いものとなるであろうことを願っている。

(2)　　出口　菜摘

報告者は，平成15年8月7日から9月21日（20日現地発）まで，COE経費により，ロンドンに滞在した。最初の17日間は，ロンドン大学や大英博物館に近い，ラッセルスクエアーのホテルに滞在し，その後，COEロンドン・サブセンターに移った。

ロンドン滞在の目的の一つは，1900年前後から活発になった，ロンドンの都市計画についての資料，そして都市の娯楽として研究の対象としている，ミュージック･ホールに関する資料を収集することであった。都市計画についての資料は，London County Council（ロンドン議会）が発行したパンフレット，都市計画に関する当時の地図などである。これらの資料は性質上，日本国内で入手することは困難であったが，Senate House にある図書館（通称Senate House Library）と大英図書館，古本屋を中心に収集を行い，成果をあげることができた。今回収集した資料の一部は，平成15年11月9日に行われた日本T. S. エリオット協会第15回大会（於・駒澤大学）で，「ロンドンの都市計画と*The Waste Land*」として発表した。研究発表の内容は後述し，まずロンドン大学SOASの施設と大英図書館について報告したい。

7日の晩にロンドンに到着し，翌日8日にSOAS関連施設であるBrunei Galleryへ。そこでロンドン大学SOAS，ブリーン教授に紹介していただいた日本研究センターの秘書，バーバラ・ラゾイ氏に会った。渡英前，メイルにてブリーン教授に，他のカレッジの図書館も使用させて欲しいとの希望を添え，SOASの図書館のパスを申請したその際，「COEにおける研究活動」と「略歴」を添付したが，ブリーン教授はそれら基にAcademic Hospitalityを受けられるよう手配してくださった。ラゾイ氏から受け取った文書によると，Academic Hospitalityとして，SOASの図書館の使用，セミナーの参加，SOASの特別研究員・教員社交室（Senior Common Room）の使用が許可されるとあった。また，この文書は，ロンドンにおける他の学術機関において，研究員としての身分を保証するものとして使用することができた。大英図書館のReader Passを申し込む際，身分証明書と研究員としての証明書が必要となるが，パスポートとともにこの文書を提出すると，スムーズに許可がおりた。提出書類に不備があると，面接で肩書きや研究テーマについて根堀り葉掘り質問されると聞いていたので，これは非常にありがたいことだった。大英図書館のパスについて付け加えておくと，研究員としての身分証明として国際学生証を提示しても認められないようだ。自分の所属する大学図書館の司書，または所属する機関の長に発行してもらう書類が必要である。

また，SOAS図書館からValidation Formを発行してもらい，Senate House Libraryのパスを取得した（このフォームを発行してもらうには，SOAS内でも人数が限られているため，ブリーン教授に確認が必要である）。フォームがなくても一定の料金を支払えばSenate House Libraryを利用することはできる。具体的には，「閲覧のみの場合，1週間で£25，1日だと£5。1年，半年の場合，貸し出しと閲覧で，それぞれ£150，£70ポンド」である。大英図書館との使い勝手の違いについて簡単に述べておくと，Senate House Libraryは貴重本をのぞいて，基本的に開架になっているので，自由に手に取ることが可能である。一方，大英図書館は取り寄せてもらわなければならないので，時間がかかる上に，「本との偶然の出会い」は期待できない。しかし両図書館を使い分けることで，効率よく資料を収集することができるのではないだろうか。日本においても，大英図書館の資料は入手することが可能で，今や現地に行かなくても資料収集が可能だ，という声が聞かれるが，例えば，1900年前後の雑誌論文を読む場合，その論文だけではなく前後に収録されている論文，また，その雑誌の目次も含めて分析が必要であると考えているので，やはり現地に赴きその書籍を手にとることが重要なのではないかと思う。簡単にロンドンの古本屋についてふれておく。人文学関係の古本屋はCharing Cross Road沿い，またその通り

を少し外れた通りに集まっている。Charing Cross Roadは，大きな本屋が並んでいることで有名だが，古本屋も充実している。他には，大英博物館のあるGt. Russel St.，また大英図書館近辺にも人文学関係の古本が充実した本屋が集まっている。

次に，SOAS図書館2階（1st floor）のパソコンルームについてだが，パソコンルームにはWindowsが58台，Macが10台，ラップトップ対応スペース（パスワードがあればインターネットに接続可能）が20台ある。Windowsの使用にはログインパスワードが必要になるが，これは同館の事務で取得できる。Macに関しては，パスワードなしでも使用することができる。またWindows・Macともに，レーザープリンターに接続されており，それぞれExcel，Word，Power Pointなど基本的なソフトがインストールされている。日本語でも入力が可能である。

Academic Hospitalityや図書館の利用も含め，このように充実したSOASの施設を利用させていただいたおかげで，ロンドンにおいて研究を順調に進めることができた。またSOASの先生方が，お忙しいなか時間をさいて，研究のことなど話を聞いてくださったこともありがたかった。ドッド助教授に，COEシンポジウム「都市とフィクション」（平成15年9月30日・10月1日　於・大阪市立大学）のポスター，タイム・スケジュールを渡し，都市文化について話す機会があったが，その際，ドッド助教授が取り組んでおられる大正期の都市文化と，報告者が関心をもっているT. S. エリオットの都市を舞台にした作品との間にいくつかの類似点を見いだすことができ，シンポジウム「都市とフィクション」への大きな励みとなった。

最後に，帰国後行った学会発表の内容について簡単にふれておきたい。今回，収集した資料の一つに*The Proposed Demolition of Nineteen City Churches*という1920年にLondon County Councilから発行されたパンフレットがある。このパンフレットは，ロンドンのシティ（the City）地区における教会区の再編成という背景のもと，19の市教会が取り壊されることに対して，London County Councilがそれら市教会の歴史的背景，建築学的見地から，取り壊しの是非をまとめたものである。同書では，19の市教会の写真を掲載し，各教会の歴史と建築上の特徴をまとめ，その上で，各教会は保存に値すると結論づけている。エリオットの初期の代表作である『荒地』（*The Waste Land* 1922）には，パンフレットで取り上げられている教会，Magnus Martyr とSt. Mary Woolnothが描かれており，エリオットは自註においてこのパンフレットに言及したうえで，聖マグナス・マーターの教会内部の美しさを賞賛している。従来の研究において，自註は作品解釈の手がかりとして用いられてきたが，このパンフレットを本格的に取り上げたものはなかった。しかし，今回の発表ではパンフレットで述べられている教会建築やその用地を巡る問題が，『荒地』に何らかの形で反映していると考え，1920年前後のロンドンの都市環境とはどのようなものであったのか，シティ地区における市教会の取り壊しを考慮に入れて，『荒地』で描かれている都市空間の考察を試みた。発表においては，共同体の変化，つまり市教会の精神的統一が失われつつあることが，『荒地』のテーマの一つとなっているのではないかと結論づけた。このパンフレットを基に作品解釈を行なったことは評価されたが，さまざまな指摘も受けた。まだ多くの課題が残るが，今後，ロンドンで収集した他の資料の分析を行い，「都市」を要にしたエリオット論を仕上げたい。

報告を終えるにあたり，エリオットの作品で描かれている土地を体験させていただいたこと，恵まれた環境で研究させていただいことに，心より感謝の意を表したい。

ホームページ委員会

水内　俊雄

一昨年11月のサイト開設後，昨年5月に大改造を加えた。しかしながら，サイトマップの企画通りにはなかなかうまく進行しない部分もあり，再度手を加えることとなった。やはり各班の活動と，サブセンターの活動が入り乱れてしまい，最新情報のお知らせや，研究蓄積の紹介がどのサイトに適切なのか，一応その試行錯誤の結果が現在のホームページの状況とご理解いただきたい。

最新情報を常にアップデートする体制に関して，日本語版ではほぼ完全にフォローしており，最近の改良では，比較的しばらくの間情報として目に触れるべきものは，トップ画面に残す処置もおこない，より掲載情報の的確さ，即時さを保つようにした。英語版については，サイトリニューアルで，日本語版よりは，軽装備にすることにした。日本での各班の定例研究会の情報をすべて網羅する必要性はあまりないので，外国からのCOE研究員や客員研究員をまじえた国内の研究会を原則掲載することにしている。国際シンポ，共催の会議などは，これはすべて掲載しており，海外の

サブセンターの活動も，日本語，英語で，上海の場合には中国語も併記する形で，ほぼリアルタイムに掲載できる体制となった。

今後問われてくるのは，単に広報媒体としての情報提供のみならず，その情報の中身である。叢書や雑誌『都市文化研究』の全文PDF化＋公開は，他のCOEプロジェクトの中でも進んでいるものと自負しているが，今回はさらに，冊子として出版された，ハンブルク・サブセンター「開設記念共同研究会」，国際シンポ「都市とフィクション」，バンコク・サブセンター発行の第1号書籍『What's Happening on the Street』，ジョクジャカルタ・サブセンター発行の第1号書籍『Urban Culture Research Vol.1』，上海・サブセンターのニューズレターなどはPDF化して公開している。またシンポジウムや研究会などの情報も，一部PDF化をはじめたところである。このように，出版物や研究会レジュメなどの電子媒体化は，多言語的に，内容濃く，ようやく展開されはじめたものと自負している。

また懸案であった，都市文化研究センターの独自のデータベース化であるが，一応地図データを中心に，既存のデータを加工するという形での，GIS関連の電子地図の公開や，各サブセンターで収集された貴重資料の部分的公開（パスワードをかけている）などをはじめた。まだ試作品的な扱いであるが，今後深めていきたいと思っている。

いつものことながら，日常業務をおこなっている後方支援スタッフの花野孝史氏，門田充氏，四井恵介氏，杉谷智裕氏には深甚の感謝をささげる次第である。

文学研究科叢書編集委員会

阪口　弘之

1）平成15年度委員（専修・年齢順）

小林道夫（哲学），井上浩一（西洋史学），岸本直文（日本史学，書記），進藤雄三（社会学），阪口弘之（国語国文学，委員長），小林直樹（国語国文学），三浦國雄（アジア都市文化学）

2）平成15年度の主な活動

本年度の委員会は，文学研究科叢書の第2巻として，平成15年7月20日に行われた文学部創立50周年記念国際シンポジウム，および9月24日から26日にかけて開催されたインターナショナル・スクール，さらに同27日に行われたインターナショナル・スクール・シンポジウムの内容を中心にまとめた『都市の異文化交流』を刊行し，第3巻以降の編集計画についても審議した。第2巻の編集は，主として小林直樹委員が担当した。

3）平成15年度の活動記録（続）

平成15年

7月18日　第2回委員会
　議題　　叢書第2巻の編集について

10月17日　第3回委員会
　議題1　　叢書第2巻の編集状況の報告
　議題2　　15年度委員の増員――新たに進藤委員を選出
　議題3　　叢書第3巻以降の編集計画（継続審議）

平成16年

1月9日　第2巻『都市の異文化交流』第1次入稿（阪口・小林（直）委員）

1月13日　第2巻『都市の異文化交流』第2次入稿（小林（直）委員）

『都市文化研究』編集委員会

仁木　宏

1）平成15年度委員

高梨友宏・土屋貴志（哲学），仁木宏（日本史学，委員長），木原俊行（教育学），岩本真理・大岩本幸次（中国語中国文学），イアン・リチャーズ（英語英米文学）

※この他，編集委員会（会議）には，出口智美（COE事務局）が出席している。

2）平成15年度後半の主な活動

（『都市文化研究』第2号掲載のニュース以降の活動）

［編集委員会の組織］

第2号で確立した体制を踏襲して，第3号の編集作業をおこなった。

第3号について，主に編集を担当する「編集主任」に木原委員が就いた。各チームの論文投稿希望やニュースの執筆分担を調査したりするチーム担当委員は，Ａ＝大岩本，Ｂ＝木原，Ｃ＝高梨であった。

なお，COE事務局の出口編集補佐には，引きつづき執筆者情報の整理や原稿の受け渡しなどの業務を担ってもらった。また博士研究員の岸

政彦氏には，校正などの業務でお世話になった。

［査読体制］

第2号から引きつづき，投稿された論文については，第1次・第2次の二度の査読を課した（制度上は，第1次査読のみでの掲載決定もありえるが，よりレベルの高い論文に仕上げていただくため，原則として，第1次査読後，書き直していただくことになる）。第1次査読では，1本につき，編集委員1名，非編集委員（文学研究科教員）1名の2名体制をとった。第2次査読は編集委員各1名が担当した。

査読にあたっては，査読表を活用し，公正かつ正確な査読を期した。査読表をホームページ上に公開した。

［誌面構成の改編］

誌面を論文部門とニュース部門に大別し，原稿の締切，編集・校正の行程などを区別することによって機能的な編集をはかった。

文学研究科教員の論文で，査読をともなわない「研究報告」のカテゴリーは原則として廃止し，論文は，査読を経た「論文」「研究ノート」と，査読になじまない原稿からなる「特別寄稿」の二つのカテゴリーに統合した。これとは別に，研究チームなどが開催した研究会・シンポジウムなどでの報告をもとに原稿化された複数の論文をまとめて掲載する「シンポジウム」というカテゴリーを新設した。

この「シンポジウム」のなかには，査読を経た論文と査読をともなわない論文の両方がふくまれる。そこで，査読を経た論文については，（カテゴリー「論文」「研究ノート」もふくめ）論文（日本語部分）の最後に，投稿日・査読日などの情報を書き込むこととした。

［校正手順の厳密化］

校正作業の正確さと機能向上をめざして，第3号では，初校を返却する際，事前に編集主任と編集委員長が誌面のチェックをすることとした。なお，同様の目的で，ニュース部門の原稿についても，執筆者に初校のみ校正を依頼することとした。

そのため編集期間が若干長くなった。

3）活動記録（平成16年1月19日現在）

（『都市文化研究』第2号掲載のニュース以降の活動）

7月4日　第10回編集委員会
- (1)『都市文化研究』第2号投稿論文の第1次査読の結果決定　→　執筆者に書き直し指示
- (2) 長文の「特別寄稿」論文について，担当チームからの要請にもとづき，掲載を認可

7月18日　投稿論文の第2次締切（論文7本の投稿あり）

7月25日　第11回編集委員会
- (1) 投稿論文の第2次査読の結果決定
- (2) カテゴリーの英語表記の検討
- (3) 執筆者へのアンケート項目（所属表記，連絡先など）の検討
- (4) 第2号，第3号のスケジュール確認

8月1日　原稿を印刷所（ホウユウ㈱）へ入稿

9月12日　第12回編集委員会
- (1) 第2号編集状況の確認
- (2) 第3号刊行スケジュールの決定

9月25日　『都市文化研究』第2号刊行

11月10日　『都市文化研究』第3号投稿論文締切（論文9本の投稿あり）

11月14日　第13回編集委員会
- (1) 投稿論文の査読（依頼）者，査読方法の決定　→　査読
- (2) カテゴリー「シンポジウム」の新設

12月5日　第14回編集委員会
- (1) 投稿論文の第1次査読の結果決定　→　執筆者に書き直し指示
- (2) 第4号刊行スケジュールの検討　→　編集主任は岩本委員に決定

12月19日　「特別寄稿」の原稿締切→編集委員長による形式チェック

12月24日　投稿論文の第2次締切（論文8本の投稿あり）

平成16年

1月9日　第15回編集委員会
- (1) 投稿論文の第2次査読の結果決定
- (2) 第3号の内容，校正スケジュールの確認
- (3) 第4号刊行スケジュールの確認
- (4) 新年度にむけて委員の退任・新任方針の調整

1月19日　ニュース部門の原稿締切